

国立国会図書館月報

稀本あれこれ-454- 野田笛浦著『海紅園文抄』(頼山陽・篠崎小竹等評)	
図書館-未知の世界へのいざない 世界図書館情報会議	
一第71回国際図書館連盟(IFLA)大会に参加して	・ 1
国立図書館長会議、「世界図書館」会合、国立図書館分科会	
デジタル環境への国立図書館の挑戦	=安江 明夫 ・ 4
議会図書館分科会	
議員ニーズの正確な把握の重要性を再確認	=鎌田 文彦 ・ 7
資料保存分科会関係会議、IFLA/PACセンター長会議	
「治す」より「防ぐ」- 予防的保存対策の実践をみる	=小林 直子 ・ 10
目録・書誌情報関係会議	
さらなる国際化と標準化をめざして	=稲濱みのる ・ 13
子ども・ヤングアダルト図書館分科会	
発足50周年を迎えて - 歴史に学び、未来を拓く	=村山 隆雄 ・ 16
オスロ点描	・ 20
オランダ王立図書館(Koninklijke Bibliotheek)との協定の締結について	・ 23
平成17年度都道府県及び政令指定都市議会事務局図書室職員等との	
連絡会議について	・ 24
平成17年度国立国会図書館長と大学図書館長との懇談会について	・ 25
レファレンス協同データベース事業	
データ作成・公開に関するガイドラインの策定について	・ 32
第1回レファレンス協同データベース・システム研修会開催	・ 35

本屋にない本	・ 26
国立国会図書館の編集・刊行物	・ 27
速客近客	・ 28
NDL news	・ 29
館内スコープ	・ 31
電子図書館サービスのページ	・ 39
『国立国会図書館月報』年間索引	・ 53
ビジュアル国立国会図書館博物館(5)	・ 54

<ご案内>	
公開シンポジウム デジタル時代における図書館の変革-課題と展望-	・ 36
<お知らせ>	
常設展示のお知らせ	・ 31
「レファレンス協同データベース」を公開しました	・ 34
電子展示会「描かれた動物・植物-江戸時代の博物誌-」を完全公開します。	・ 37
「国立国会図書館資料デジタル化の手引き」を公開	・ 37
国際子ども図書館 学校図書館セット貸出し アジアセット(中国・東南アジア諸国)	
の貸出し開始について	・ 40
国際子ども図書館展示会「もじゃもじゃペーターとドイツの子どもの本」関連講演会	・ 40
年末年始のサービス休止について	・ 41
東京本館および関西館の資料整理休館日の臨時変更について	・ 41
NDL-OPACに雑誌記事索引及データ追加提供	・ 42
新連載が始まります-テーマは関西館の資料-	・ 42

12

2005

No. 537

国立国会図書館利用案内

東京本館 〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331
利用案内 電話 03 (3506) 3300 (音声サービス)
電話 03 (3506) 3301 (FAX サービス)

関西館 〒619-0287 京都府相楽郡精華町精華台8-1-3
電話 0774 (98) 1200 (音声サービス)
利用案内 電話 0774 (98) 1212 (FAX サービス)

ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>

利用できる人 満18歳以上の方

資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。

開館日 月曜日から土曜日

休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始（41頁参照）、資料整理
休館日（第3水曜日）

所蔵資料 当館の所蔵資料は、納本、購入、国際交換、寄贈等によって収
集され、東京本館、関西館、国際子ども図書館に分散して配
置されています。

<東京本館のおもな資料>和洋の図書、和雑誌、洋雑誌（年刊誌、モノグラ
フシリーズの一部）、和洋の新聞、各専門室資料

<関西館のおもな資料>和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語
資料・アジア関係資料（図書、雑誌、新聞）、科学技術関係資料、文部科学省
科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

----- 東京本館のサービス時間 -----

開館時間 月～金曜日 9:30～19:00 土曜日 9:30～17:00

※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の開室時間は17:00までです。

資料請求時間 月～金曜日 9:30～18:00 土曜日 9:30～16:00

※ただし、音楽・映像資料室、人文総合情報室特別コレクション、憲政資料室および古
典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。

即日複写受付 月～金曜日 10:00～18:00 土曜日 10:00～16:00

後日複写受付 月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:30

オンライン複写受付 月～金曜日 10:00～17:30 土曜日 10:00～15:30

----- 関西館のサービス時間 -----

開館時間 10:00～18:00 **即日複写受付** 10:00～17:00

資料請求時間 10:00～17:15 **後日複写受付** 10:00～17:45

セルフ複写受付 10:00～17:30 **オンライン複写受付** 10:00～17:00

※詳しくは当館ホームページをご覧ください。

稀本古札之札

(454)

有月其所以徵焉也乎地強人後物換星移古今
 極遠而不測者月也點去歷歷太序者即此也
 迢迢觀之月也其可徵者莫過於月也古語史必
 于月而面之月也其光也此蓋其世若不信之刺
 此蓋其世之不信之刺也

文思翻：形勢殆與點燭新

曲折居公：如星夫

有得者月有弊者月其為多歷一兒可知
 何以序引之國事 願為以爲難決之據也

○ 萬餘卷樓記
 藏者納野金也利於人者不可指數而全居其首焉
 益於人者不可件候而居為之魁焉金而財之垂求
 而不獲無欲而不遂居而藏之可以益智而可以
 可以運材可以施之於身於人金天下之至寶也
 庶貯而不知藏之而不得其用則積之至博也與
 尾僕石柯揮掃天下之至寶也居此藏而不知藏
 而不不知施之於身於人則藏之如卸山而藏其
 何操夫自虎蘭羞之於漢備久蓋則之於隋藏正集
 變之於唐藏史三館六滿之於宋藏別藏失大則大

宗久大文：踏云取此第卷中 傑凡 啟
 余細心讀之 評

習子輝峰先生卷初月一序于是一語令觀者
 小秋而視他廣焉之大區于鳥發而出所與也
 踐踏長者安於生且助引、伺審據厨子
 漢評

宗賀男氏藤山居隆上士序
 士者三等上士也中士也下士也而中士下士之於
 上士相去極遠矣其為士也世一保之子孫藏之為
 郡宰為隊長為餘人國相者皆上士也其為士也止
 於其身而子孫或降為管更為皂隸為農而耕為商
 賈而奔之四方者中士下士也故士者為士者祇有
 一上士而已矣是故藩制之大戰也恭惟我
 藩祖立國政依於士之有功德者報之以上士之位
 使其與國終始同休戚意欲自非有大謹則末嘗
 降也則上士者

の だて き ほ
かいこうえんぶんしよ
野田笛浦著 『海紅園文抄』 (頼山陽・篠崎小竹等評)

自らの詩文稿を師、先輩、知己に回覧して批評を求めめることは、江戸時代後期には儒者の中で盛んに行われていた。書き入れられた評語、批点等を、刊行の際そのまま印刷して名譽することも多い。本書も、そうした評語書き入れ本の一つで、丹後舞鶴出身の儒者野田笛浦(一七九九〜一八五九)の文章に、頼山陽(一七八〇〜一八三二)、篠崎小竹(大坂の儒者。一七八一〜一八五一)、古賀侗庵(古賀精里の三男、昌平黌^{ちやうへい}教官。一七八八〜一八四七)、坂井虎山(広島藩儒。一七九八〜一八五〇)が評を付したものである。

表紙に「海紅園文抄 笛浦手稿 全」とした書題簽を貼付。第一丁表に「海紅園文抄」と墨書(汚損の状態から、元来はこの丁が共紙表紙であったかと思われる)。巻頭に「海紅園文抄 田辺 笛浦野田逸子明甫著」と記す。本文は一九丁、一〇篇の文章を収める。第九丁までは、朱の圈点、朱または墨の頭評、各篇末の評語等があるが、第一〇丁以降には書き入れは全く見られない。「野田笛浦 海紅園文抄 関君出品 稿本一冊 頼支峰旧蔵 山陽、小竹、侗庵、虎山等ノ評アリ」と記した紙片が挟み込まれている。最終丁裏に「頼復」の朱印があり、頼支峰(山陽の次男、一八三三〜八九)の旧蔵であったことは確認できる。後表紙に「関氏蔵書」の印があるが、関氏については未詳。

所収の「縦堂記」に「追思丙戌秋、余将赴江戸也、(中略)屈指則今已六年耳」と見え、この一篇が書かれたのは、丙戌(文政九年)から六年後、天保三年(一八三二)となる。また、評者の一人頼山陽が同年九月二三日に歿しているのも、本書の成立年代を考える上で参考になろう。

当館には、『海紅園文稿』と題する写本が鸚軒文庫に三点ある(請求記号 詩文三二四〜三二六)。本書所収のものと同じの文章を含み、山陽、小竹らの評語もある。しかし、収録の文章やその排列、評語書き入れの位置や評者名注記の有無、形式等には異同が多い。本書は中でも特徴があり、これら相互の関係については、さらに検討が必要である。

笛浦の詩文集としては、他に『海紅園小稿』がある。歿後の明治一四年に刊行されており、山陽、小竹、来舶の清人朱柳橋らの評語や文政九年の序跋がある。東京大学史料編纂所蔵写本(野田家伝求)が自筆稿本とされ、各人の評語、批点等も付されている。本文の筆跡は、写真で比較した限りでは、本書とは異筆のようである。

野田笛浦は丹後田辺藩士の子として生まれ、江戸に出て古賀精里・侗庵父子に学ぶ。江戸や大坂で開塾、小竹、虎山、斎藤拙堂とともに文章四大家と称されたという。晩年は田辺藩の執政として藩政改革に尽力した。名は逸、字は子明、通称希一、別号海紅園。

写本一冊。大きさ二三・九cm×一七cm。大正六年八月三〇日購求。(請求記号 WA17-3)

(宇津 純)

図書館 ― 未知の世界へのいざない

世界図書館情報会議 ― 第71回国際図書館連盟 (IFLA)大会に参加して

大会の概要

八月一日から一八日まで、ノルウェーの首都オスロで、「世界図書館情報会議―第七一回国際図書館連盟(IFLA)大会」が開催された。大会の総合テーマは、「図書館―発見の旅」であった。大会プログラムは、冒頭に、総合テーマを敷えんして、「好奇心と想像力は、知識の世界を超えて、あなたを未知と意外の世界へと誘う。図書館は、あなたの路程の協力者である」と、現在の図書館の果たすべき役割を、高らかに宣言している。

参加者は、一三三の国と地域から二、九八三名であり、うち初参加者はちょうど一〇〇〇名であった。国別参加者数では、地元ノルウェーがトップで三八三名、二位は米国の三八二名、三位はスウェーデンの二二七名であった。アジアからは、中国が一六二名で全体の四位となり、韓国は一二八名で全体の六位であった。(注1)

日本からは三五名が参加した。このうち当館からは、安江明夫副館長を団長として、村山隆雄国際子ども図書館長、鎌田文彦調査及び立法考査局海外立法情報課長、小林直子収集部資料保存課課長補佐、稲濱みのる書誌部逐次刊行物課課長補佐の五名が参加した。

大会期間中、オスロ中心部に位置する主会場オスロ・スペクトラムとその周辺のラジソン・ホテル、クラリオン・ホテル、オスロ会議センター等で、大小合わせて二一六回の各種会合が開かれた。また、オスロ・スペクトラムでは、恒例の展示会・ポスターセッションが行われた。

開会式

開会式は、一四日午前、国王ハラルド五世臨席のもとに、オスロ・スペクトラムで執り行われた。

K・ラゼロカIFLA会長(ポツワナ)は、スピーチの中で、「社会的責任と安定」のモデルとしての北欧諸国を称えるとともに、参加者がプロフェッショナルとして、人間として、より大きな社会的貢献ができるようになるために、

大会期間中、新しい知見を得て、異なる文化に対する理解を深めるよう呼びかけた。

また、基調講演を行ったオスロ大学経済史学科教授で、ノルウェーのノーベル委員会議長を務めるF・セーイェルステード博士は、表現の自由の重要性を強調するとともに、図書館が文化的伝統とデジタル技術という二つの土台のもとに、「知識の銀行」としての重要な社会的役割を果たすべきと述べた。

開会式の司会を務めたヴィーク氏は、著名な歌手、俳優であり、式の合間に、イプセンの詩の朗読やミュージカルの一節の歌唱で会場を沸かせた。また、ハーブやバイオリンによる北欧の音楽が開会式の随所に盛り込まれ、しっとりとした雰囲気



大会主会場のオスロ・スペクトラム前でノルウェーIFLA組織委員会委員長ジョン・ビン氏を囲んで。左から鎌田、安江、小林、稲濱、村山



ノルウェー国立図書館

気を醸し出した。(注2)

評議会

IFLAの最高議決機関である評議会は、八月一日と一八日の二回開催された。当館からは、村山国際子ども図書館長が、投票権を持つ代表として出席した。

第二回評議会では、ラゼロカ会長を引き継いで新会長に就任したオーストラリアのA・バーン氏が議長を務め、著作権その他法的問題委員会、情報へのアクセスの自由と表現の自由に関する委員会からの報告が行われた。また、IFLAのウェブサイト(IFLANET)同様、IFLAのすべての情報と出版物に、読むことに障害を持つ人々(print impaired persons)がアクセスできるようにするとの決議案が提出されたが、決議案は技術面と財政面での問題があるため、IFLA理事会と視覚障害者分科会で更に検討するとバーン会長が引き取り、表決には至らなかった。

ノルウェー国立図書館新装開館式典

大会期間中の一五日午後、ノルウェー国立図書館が新装開館し、ノルウェー国王臨席のもとに開館記念式典が行われた。新国立図書館はオスロ

市中心部の西方、王宮の近くに位置している。

ノルウェー国立図書館の歴史は意外に浅く、一九九八年に設立されたばかりである(後述のとおり、資料保存部門については、それより前にモイラナに設立された)。それまでは、一八一一年設立のオスロ大学図書館が、事実上の国立図書館の役割を果たしてきた。しかし、オスロ大学のキャンパスが郊外に移転し、新しい大学図書館も新キャンパスに建設されたことに伴い、一九九九年に、旧オスロ大学図書館が、蔵書の一部とともに国立図書館に移管され、今回新装開館したという次第である。(注³)

館内で開催された開館式典は、前衛舞踏・パフォーマンスをふんだんに取り入れた斬新なものであった。IFLA大会の参加者は、隣接する公園に招待され、芝生に座りながら、大スクリーンに映し出される式典の模様―その「未知と意外の世界」―を堪能したのであった。

閉会式

閉会式は、一八日午後、ラジソン・ホテルで行われた。

バーン新会長が就任のスピーチを行い、また功績のあった会員の表彰、優れたニューズレターを発行した分科会の表彰等が執り行われた。さらに、来年のIFLA開催国である韓国から、ソウル大会への参加を呼びかけるスピーチ、プロモーションビデオの上映があり、華麗な韓国民族舞踊で来年への雰囲気を一気に盛り上げた。

今後のIFLA大会は、二〇〇六年韓国・ソウルに続いて、二〇〇七年南アフリカ・ダーバン、二〇〇八年カナダ・ケベックで開催されることになっている。

図書館―発見の旅

オスロは、人口約五〇万人の落ち着いたたたずまいの街だが、我々はるか東方の異国からの来訪者を、何の違和感もなく自然に受け入れる文化の奥深さを備えていた。そのような土台があればこそ、「未知と意外の世界」への「発見の旅」が可能となるのかもしれない。

以下、国立図書館長会議、各分科会、プレコンファレンスなど、当館代表団が参加した各種会合の模様を報告する。各報告の中で言及している発表原稿、各種ドキュメント類の多くは、IFLANET (<http://www.ifla.org/>) で参照可能であるので、活用されたい。また、最後に「オスロ点描」と題して、オスロ滞在中に団員が体験し、感じたことを様々な視点から紹介する。

(注¹) 大会終了後九月に発行されたIFLA Express 8-The final

Chapter from Oslo による。

(注²) 開会式の紹介にあたっては、大会時配布のFinal Programme およびIFLA Express, No.4, 2005.8.15を参照した。

(注³) ノルウェー国立図書館の歩みについては、IFLA Express, No.4, 2005.8.15を参照した。

デジタル環境への国立図書館の挑戦

安江 明夫

第三二回国立図書館長会議(CDNL)

例年、IFLA大会時に開催されている国立図書館長会議(以下、CDNL)が、本年も新装のノルウェー国立図書館で八月一七日に開催された。ノルウェー国立図書館長から歓迎のあいさつがあったが、会場となった小講堂は本会議が記念すべき最初の使用と紹介された。

会議出席者は議長から一五五名と発表された。IFLA事務局やIFLAコア活動責任者、ユネスコ関係者、同行者も含めての数字であり、国立図書館から見れば八〇数か国ぐらいかと推量したが、それでも国立図書館長あるいはその代理者の会合として大規模である。当初、十数名の参加者からスタートしたCDNLのその後の大成長がうかがえる。ただ残念に思ったことは、アジアからの出席が少なかったことである。確認できた範囲では、中国、韓国、マレーシア、タイ、日本の五か国に過ぎなかった。

(会議の概要)

会議では次の報告とそれに基づく質疑、意見交換が行われた。

- (一) ICABS(書誌標準に関するIFLA・CDNL同盟)の現況と今後の計画(オランダ)

- (二) 国立図書館の誇示―情報社会に関する世界サミット(WSSIS)とナショナルデジタル戦略(ニュージーランド)

- (三) 全国図書館ネットワークの構築―変貌する環境と国立図書館の役割の変化(フィンランド)

- (四) IIPC(インターネット保存のための国際コンソーシアム)(アイスランド)

- (五) 技術変化に対応しうる納本法の枠組み(ノルウェー)

- (六) IFLA事務局、国立図書館分科会、PAC(資料保存コア活動)、ユネスコ、各地域国立図書館長会議の報告、ISBN、ISSNからの各報告

(主たる議論)

全体としてデジタル環境への国立図書館としての対応、取組みが会議の主体を占めている。またそれだけに毎回の会合で進ちょくの報告があり、継続して協議されているのが特徴と言える。

そのなかで、今回の会合で特記すべき点は次の二点かと思ふ。

- 一つは「国立図書館の誇示」と題した報告に関連して、「情報社会に関する世界サミット」に対し、国立図書館長

会議として、同サミットに提起されている図書館関連の基本方針を承認する旨の声明送付を決定したことである。これは、国立図書館が納本図書館、全国書誌作成機関などの役割とともに、図書館界のリーダーとしてそれぞれの国における図書館の発展をアピールする社会的役割を受け持とうとするものと理解した。注目に値しよう。

もう一つは新聞などでも報道されているグーグル社の米英の大規模学術図書館蔵書電子化計画に対する議論である。フランス国立図書館長が「英語のグローバル化、文化の寡占帝国主義の問題がある。商業資本主義と公共サービスの対立が大いに懸念される」とまず表明。それに続いて、図書館の役割、エンドユーザーの立場、電子化のための資金調達、図書館と企業の連携の可能性などについて相当に活発な議論が展開された。無論、直ぐに決着のつくテーマではなく、継続する課題として次回会合でも議論することになった。

また次回会合では、電子図書館関連の継続議題のほか、視聴覚資料センター設立の米国議会図書館の事例、国立図書館と公文書館を統合したカナダの事例、を報告としてとりあげることになった。会議の最後に、キム・テグン韓国国立中央図書館長が、次回会議をホストする国立図書館長として「万全を期して準備にあたりたい。多数の出席者を期待している」とあいさつされた。

会議中、東京でお会いしている中国、米国、カナダ、

ドイツ、フランスの代表の方々と歓談できた。また当館が協力協定を締結したオランダ国立図書館、当館招へい予定の英国図書館長、そして今大会で初めてお会いしたオーストラリア、韓国の国立図書館長とお話しできたのも幸いであつた。

そうしたなか、ウイルソン・カナダ国立図書館公文書館長とは次の会話を交わした。「ウイルソンさんはCDNLがどのように発足したかご存知ですか」「いや知らない」「二〇〇〇年程前に、当時のシルベスター・カナダ国立図書館長が発議して、オタワで最初のCDNLが開催された。それがこの会議の嚆矢ですよ」「先輩のシルベスター氏には前に会ったけど、それは知らなかった。教えてくれてどうもありがとう」。

一九七四年に発足したCDNLは、今や長い立派な歴史をもつことになった。CDNL創生期のシルベスター(カナダ)、ウエルシュ(米)、フックウエー(英)氏等の顔を思い浮かべながら、しばし三〇数年を振り返った。

「世界図書館」会合

世界図書館(Bibliotheca Universalis 以下BU)は一九九五年の情報サミット(ブリュッセル)でスタートした世界規模での電子図書館振興事業である。これまで年に一、二度、IFLA大会の折などに加盟国で会合を開催してきている。

オスロでのBU会合は、一八日昼にラジソン・ホテルのロビーで開催された。昨年の会議と電子メールでの連絡によりBU加盟国の大方は、電子図書館の世界的な進捗よくとBUコンテンツの将来性が乏しいことから、BUの終了に同意していた。それに対して即座には同意できないとしたのは、イタリア国立図書館と当館である。

そのような背景で開催された今回の会合には、BU加盟国一四か国のうち、米国議会図書館を除く一三か国の代表が出席した。議長は、ルネ・ユルブーズ氏（フランス国立図書館）である。

会議の概要を示すと、まず議長が「BUの終了とフランス国立図書館によるウェブサイトの維持管理、に大方のメンバー国が賛同している。しかしイタリアと日本がその結論に疑義を表明している」と説明。それぞれの主張を聞き、議論することになった。

イタリアはコンテンツ追加の予定があり、そのためにBUの存続が望ましいと表明。この件はフランス国立図書館が調整し、BU終了後もコンテンツ追加ができるようにすることです承された。

日本は「情勢の変化にかんがみ、BUを終了することには基本的に同意している。終了の場合に、フランス国立図書館がウェブサイトを維持管理することも歓迎している。しかし大きな国際的事業として進めてきた本事業をコンテンツ拡充に将来性がない点だけに矮小化して終了とするの

は賛成できない。少なくとも、国際的な協力事業として大きな成果を挙げたBUの終了には、一定の総括が必要である」と意見表明した。

この件については、出席者の多くが賛同し、加盟国会議として総括をまとめ、維持されるBUサイトのトップに掲載することです承された。総括案は日本が作成し、加盟国に諮ることとなった。

なおBUは、手順を進め、本年中に一〇年の歴史を閉じる予定である。

国立図書館分科会

国立図書館分科会では、「文化遺産のネットワーク化―図書館、文書館、博物館の連携」をテーマに、一五日午後二時間のセッションを開催した。以下、概要を示す。

最初にオランダ・ラトバウト大学のネイメンゲン氏より、「文化遺産のネットワーク化―機会と挑戦」と題するテーマの全体像を示す基調的な報告があった。氏の基本的な視点は、「デジタルの時代には、図書館、文書館、博物館・美術館は区別されるべきものではない。それゆえ、これらの文化機関が連携・協力し、総体として国民への幅広いサービスを提供しなくてはならない」である。

次いで、ノルウェー・北欧、アフリカ、アジア・オセアニア、欧州、中南米、北米、と世界の国・地域ごとに、文化遺産のネットワーク化の現況に関する六本の報告があっ

た。アジア・オセアニア地域についてはババ・マレーシア前国立図書館館長が報告した。氏は、アジア・オセアニア国立図書館長会議の枠組みでのこのテーマに関するアンケート調査の結果等を紹介し、なかで「東アジアの日本、韓国、台湾では、電子化は進ちよくしている。しかし文化遺産機関相互の連携は見られない」と報告した。

所感を述べれば、図書館、文書館、博物館等の間の連携が重要となってきたのは報告に指摘のあるとおりである。利用者から見れば、必要とする情報がどこにあっても、

一緒に検索できて入手できることが望ましい。物理的な場所を問わないデジタルの時代には、それが可能となっている。その追求が、図書館間の連携とともに大きな課題となってきたのである。日本について言えば、それは緒に就いたばかりであり、現状では「連携はない」と評されても一面では仕方ない。ただ、当館や国立情報学研究所でも日本の学術情報資源、文化資源を横断的に検索できるポータル構築の計画があり、新領域の展開を期したいところである。

(やすえ あきお 副館長)

議会図書館分科会

議員ニーズの正確な把握の重要性を再確認

概要

議会のための図書館及び調査サービス分科会(通称「議会図書館分科会」)では、IFLA年次大会に先駆けて、プレコンファレンスが八月一〇日から一二日までオスロのノルウェー議会議事堂で開催された。今回のプレコンファレンスのテーマは、「議会のための知識と情報―民主主義の基礎」であり、この統一テーマのもとに、各種講演、セッション、討論が行われた。席上配布の資料によると、参加者は一一二人であった。

鎌田文彦

IFLA年次大会開会後の一七日には、議会図書館分科会のワークショップが議会議事堂で行われ、一八日にはオープンセッションがオスロ会議センターで開催された。

筆者は、議会図書館分科会連絡委員の立場で、これらの会議に出席した。各セッションの日程は、表(次ページ)のとおりである。

リサーチ・デイでの報告

プレコンファレンスの三日目となる八月二日リサーチ・

日程

- 8月10日：プレコンファレンス
- ・ノルウェー議会関係者によるセッション「議会過程における知識と情報の必要性」
 - ・トム・クリステンセン（ノルウェー大学教授）講演「公開性、透明性と民主主義—ノルウェー・モデル」
 - ・ノルウェー議会調査サービスに関する報告
 - ・ノルウェー議会見学
- 8月11日：プレコンファレンス
- ・ノルウェー議会図書館のサービスに関する報告（イントラネット、ニュース情報サービス）
 - ・北欧5か国議会図書館の協力関係に関する報告（フィンランド、スウェーデン、デンマーク、アイスランド、ノルウェー）
 - ・ノルウェー議会図書館見学
- 8月12日：プレコンファレンス（リサーチ・デイ）
- テーマⅠ：議会関係者への最新かつ信頼できる知識の提供—議会調査サービスの主要課題（スコットランド、アルメニア、ノルウェーから報告）
- テーマⅡ：議会過程における調査サービスの役割（カナダ、イスラエル、英国、日本から報告）
- 8月13日：常任委員会
- 8月17日：ワークショップ（筆者は①②③小班に参加）
- 次の6テーマについて、小班に分かれて情報および意見を交換した。
- ①議員のニーズの把握（マーケティング）、②調査活動の評価、③調査サービスの外部委託、④人材育成、⑤情報リテラシー、⑥情報技術
- 8月18日：オープンセッション
- ①スコットランド議会の調査サービス（英国 J. シートン氏）
 - ②情報の質に関する基準について（米国 D. シーダー氏）

デイにおいて、テーマⅡの四人の報告者の一人として、「国立国会図書館における海外立法情報提供サービスの進展」と題して約二〇分間の報告を行った。

当館の最近の機構改革とりわけ調査及び立法考査局の機構改革の中で海外立法情報調査室・課が設立された経緯、諸外国の立法動向をモニターして国会に情報を提供する同室・課の活動の概要を紹介し、また同室・課が行った十数か国の「人身取引」に関する調査を事例として、海外立法情報を国会に提供することの意義を説明した。

（米国議会図書館）に交代した。長年、同分科会で活躍してきて、もうすぐ引退とのことで、お別れのあいさつをした方もおり、分科会の指導者の世代交代の時期にあるとの感を強くした。

（二）北欧五か国の議会図書館間協力

プレコンファレンス二日目に、北欧五か国の議会図書館の協力関係に関する報告があった。フィンランド、スウェーデン、デンマーク、アイスランド、ノルウェーの五か国の議会図書館は、定期的に会合を開くとともに、個人的な連

会場からは、提供する情報の選択の基準についての質問があった。司会者からは、調査サービスのあり方を考える上で示唆に富む報告とのコメントをいただいた。また、何人かの参加者から、興味深かったとの評価をいただいた。

所感

（一）分科会の世代交代

今大会を機に、議会図書館分科会常任委員会の議長が、ベテランの M・デラノ氏（チリ議会図書館）から、D・シーダー氏

絡を密にして常時ノウハウを交換するなど、密接な協力関係を築いているとのことである。一国一館の限界を越える日常的な近隣諸国間の協力関係については、学ぶべき点が多々あると感じた。なお、図書館界全体でも「北欧図書館協会」が活発な活動を展開しているとのことである。

(三) 韓国国会図書館の意気込み

韓国国会図書館からは、ベ・ヨンス館長をはじめとする六人が会議に参加した。韓国国会図書館は、来年のプレコンファレンスのホストを務めることになっており、その準備の一環として多くのスタッフが研さんを積む目的でオスロに来ており、来年に向けての並々ならぬ意欲を感じさせられた。ベ館長は、来年のプレコンファレンスを活気あるものとするために、協力をお願いしたいと呼びかけていた。韓国国会図書館のホームページには、すでにプレコンファレンス専用ページができており、<http://www.nanet.go.kr/prefia2006/>。

(四) 議員ニーズの把握の重要性

プレコンファレンス全体をとおして、議員の真の意図およびニーズを把握したうえで、図書館サービスおよび調査サービスを遂行することの重要性が、度々強調されたのは印象的であった。

例えば初日に行われたノルウェー議会関係者によるセッション「議会過程における知識と情報の必要性」の際、会場からの発言も含め、次のような論点が提起された。すな

わち、インターネットおよびEメール等の電子的手段をサービスの過程に活用することが、議員にとっての利便性を増し、サービス向上になると考えて、電子的仕組みの充実に力を注いできた。しかし、直接会話をしないで、メールなどにより文章でやり取りするだけでは、その意図が本当には汲み取れないという問題がある。議員が一体何を知らたいのか、何をしたいのか、よく把握しないままに、サービスを行っている可能性がある。このような点は、よくよく反省しなければならぬ、との議論である。

一七日のワークショップの際、ドイツ議会図書館のM・コイニング館長がコーディネーターを務めた「議員のニーズの把握（マーケティング）」のセッションでも、この問題が集中的に取り上げられた。「競争相手」が多数存在する現状のもとでの議会図書館、議会調査部門の生き残りは、いかに適切に議員のニーズを把握して、質の高い情報を提供することができるかにかかっているという主旨の議論が行われた。

(かまた ふみひこ 調査及び立法審査局海外立法情報課長)



ノルウェー議会議事堂全景

「治す」より「防ぐ」——予防的保存対策の実践をみる

小林直子

プレコンファレンス

「北極圏資料保存コロキウム」すべての図書館資料のための長期保管対策」と題された資料保存分科会・新聞分科会合同プレコンファレンスが、八月一日～二日に、ノルウェー国立図書館ラナ支部で開催された。オスロから北へ約一〇〇kmの町モイラナにある同館には、一九九三年にオープンした自慢の保存書庫があり、国立図書館の機能のうち、おもに保存と媒体変換を担っている。参加者は二八名と小規模で、そのほとんどが両分科会の常任委員とノルウェー国立図書館の関係者であった。

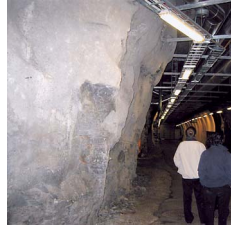
今回のプレコンファレンスは、同館の資料保存および媒体変換活動の紹介と施設見学を通して、多様な媒体の図書館資料を長期保存するための工夫の数々を学ぶプログラムとなっていた。岩山をくりぬいて地中に建設された保存書庫、可燃性の高い危険なニトロセルロース・フィルム専用の特別保管庫、媒体変換ラボ、大規模自動書庫等を見学したが、ここでは保存書庫について紹介したい。

保存書庫はなだらかな岩山をくりぬいて作られた空間で（下段写真）、四三km分の書架が設置され、そこに図書・新聞・写真・磁気テープ・マイクロフィルム・映画フィルム

などあらゆる媒体の保存すべき資料を保管している。内部の気温は年間通して八℃なので、湿度を調節し（常時三三%）、空気の循環を管理するだけで各種資料の化学的な劣化が進みにくい理想的な保管環境が得られる。また、この地域は地震がない地盤の固い土地であるため、掘りっぱなしの洞窟のような岩山書庫でも問題ないのだそうだ（次ページ写真）。固い岩山のある寒冷地という環境を生かして、「治療より予防」という資料保存の基本的な考え方を具現している施設といえる。ところで、この岩山には初めから二つの穴が作っており、現在の書庫がいったいになると、二つ目を書庫として整備していくとのこと。「そこもいっばいになれば、また別の山を掘ればいい」と何とも太腹な計画である。

なお、当然のことながら、温湿度管理だけで資料が長期保存できるわけではなく、同館ではこのほか、①異種の資料が近接しないように保管する（劣化して有害な物質を生じた場合に他の媒体に影響しないように）、





②資料を一般利用に供さない(何らかの複製物で提供する)、③書架に納める前にクリーニングする、④各資料に適した保存箱等に収納して排架する、⑤停電・火災など起こりうる災害への対策を計画する、などを行っている。「安定した環境で資料を保管することによる予防的保存を重視する」という同館の保存方針に沿った見事な保存対策の実際であった。

資料保存分科会常任委員会

大会期間直前直後の一三日、一九日に常任委員会が開かれた。出席者は二〇人前後の常任委員・連絡委員で、欧米以外の地域の人も複数いる幅広いメンバー構成であった(昨年はアジアの常任委員がいなかったが、今期は筆者を含め日中韓から一人ずつ選出された)。IFLA/PAC(資料保存コア活動、以下PAC)国際センター長、フランス国立図書館資料保存技術センター長などがオブザーバーとして参加していた。事前に配布されていた議題に沿って、来年以降のセッションおよびプレコンファレンスの企画、委員会の事業として作成した保存関係規格一覧(<http://www.ifla.org/VI/s19/pubs/first-do-no-harm.pdf>)の維持管理方法などについて話し合った。

次回のソウル大会では、資料保存における教育活動の重

要性を訴えるセッションを行うことになった。資料保存の対象となる媒体が多様化し、資料保存に関わる人の範囲が広がってきて、教育や研修の手法の革新が求められていることから、保存教育のさまざまな事例やツールの発表の場を持ちたい、という趣旨である。会議の場では具体的な発表者の決定には至らず、その後、一〇月末からIFLAのメーリングリストで広くペーパー募集の呼びかけを始めた。事前議題になかった件では、PACアジア地域センター(国立国会図書館)から委員長宛の「二〇〇六年のプレコンファレンスを東京で開催したい」との提案を検討した。通常プレコンファレンスは分科会が主催し、本番の二年前から常任委員会で企画・準備していくものであるが、今回は、アジア地域センターが企画・運営を受け持つという形で、分科会主催の会議とすることになった。

IFLA/PACセンター長会議

八月一五日一〇時から一二時まで、標記会議が開かれた。出席者はPAC国際センター長、九人の地域センター長(代理を含む)、PAC諮問委員会委員長、センター長の随行者、オブザーバーの計一五人で、当館からは那須雅照アジア地域センター長代理の安江副館長と筆者が出席した(ロシア、ベネズエラのセンター長は欠席)。

諮問委員長からは、PACの自己評価および同業者評価を委員会で検討し、全体としてよい評価を得たという報告

があった。また、来年三月に退職する現国際センター長の後任を九月中に公募することであった。その後各地域センター長からおもな活動の報告がなされたが、今回議論のテーマとなるはずだったPACの次期戦略計画については、時間が足りずに話し合うことができなかった。続きは、来年三月にパリで開催予定のセンター長会議に持ち越された。当館からは、アジアを担当する地域センター長等が一堂に会してアジア地域の保存協力を話し合う会議と、スマトラ沖地震・津波による文書遺産の復興支援に関するセミナーを、一二月に開催予定であることを発表した。国際センター長からは、災害対策に関するコンパクトな基本マニュアルを編集中で、英仏西の三か国語で今年中に刊行予定との報告があった。

PACのセンターは、一九九〇年代の六か所から一二か所に増え、センター長同士が緊密に連絡を取り合うことができていないようで、今後はコミュニケーションの活性化が課題となるのではないかと思われる。

オープンセッション

資料保存分科会のオープンセッションは、八月一日にPAC、図書館建築分科会、アジア・オセアニア分科会との共催で、「永遠のための保管―環境に優しい解決策、避けるべき誤り―資料保存における図書館建築の役割」をテーマに開催された。プレコングファレンスと同様、資料に

直接何か手を施すのではなく、資料の周囲を整えることによって長期保存に資することを目指すというコンセプトであった。早朝から四時間にわたるセッションであったが、世界各地からの一〇〇人近くの聴衆が集まった。

発表は次の六本である。PAC国際センター長による概論「資料保存の第一歩―正しい建築物を建てる」、前述のノルウェー国立図書館ラナ支部の施設紹介「山の地中書庫―千年を視野に入れて」、ロシア国立図書館（モスクワ）の改築事例「ロシア国立図書館―古い建物と新しい解決策」、上海図書館の新しい建築事例「蔵書を保存する―上海図書館の新しい建物」、スウェーデンから海水のエネルギーを利用して空調コストを抑えている事例「アルメダレン図書館―低コストのエネルギー対策」、そして「低酸素空調―図書館の蔵書の防火対策」。

六番目の発表は、図書館関係者ではなくエネルギー会社の担当者によるもので、健康に影響がない程度の通常よりやや低い酸素濃度の空調を行うことにより火災が起らない（すなわち点火・着火不可能な）環境を作るという斬新な内容であった。そのほかの事例発表では、各館の与えられた条件の中で、いかに資料保存に適した環境を作り出すかという取組みが語られた。

資料保存においては、もはや「技術で治す」ではなく「環境で防ぐ」が主流なのだと改めて実感した四時間であった。（こばやし なおこ 収集部資料保存課課長補佐）

さらなる国際化と標準化をめざして

稲濱 みのる

目録・書誌情報を担当するのは、書誌調整部会、そして、同部会を構成する目録、書誌、分類・索引などの分科会である。さらに、二〇〇三年から活動を開始した書誌標準に関するIFLA・CDNL同盟（ICABS）が加わり、引き続き、成果が期待されている。

本大会の各会合および先立ってフィンランドで開催された目録分科会プレコンファレンスに、目録分科会連絡委員の立場で参加した。その概要を報告する。

目録分科会プレコンファレンス

目録分科会プレコンファレンスは、本大会に先立つ八月一日、一二日の二日間にわたり、フィンランドの各種図書館協会の主導によりIFLA目録分科会との共催で、ヘルシンキ郊外のヤルヴェンパー市にて開催された。フィンランドを中心に



一〇〇名を超える参加者が集まった目的は、今後、インターネット環境において大きな力を持つこととなるFRBR（書誌レコードの機能要件）およびFRANAR（典拠レコードの機能要件および典拠番号）について、その理論的バックグラウンドと実際の書誌への応用の可能性について、広く啓蒙することである。

そのため、プログラムの内容は、主に三部門に分かれた。一つ目は、目録作成の理念についての概論で、歴史的見地をふまえたインターネット時代の目録作成についての講義であった。

二つ目は、FRBR、FRANAR等の理論講義で、平易な言葉で語られ、休憩時間には、多くの参加者が、これまで不明だった点が理解できるようになったとの感想を述べ合っていた。なお、FRASAR（件名典拠レコードの機能要件および典拠番号）の紹介も簡単に行われた。

そして、今回のプレコンファレンスで最も印象深かったのは、三つ目の「FRBR実践への試行錯誤の紹介」である。OCLCのフィクション作品検索データベースFICTION FINDERといった有名な例だけではなく、イタリア、デンマーク、スロヴェニアなどからそれぞれの国での試行錯

誤例、リサーチ結果の発表があり、また、民間のシステム会社の開発したFRBR理論を実践したOPACディスプレイが紹介された。

目録分科会常任委員会

八月一三日、一九日の二回に分けて、分科会の常任委員会が開かれた。

今回の常任委員会では、二〇〇七年までの任期を務める新議長、事務局長が選出された。議長には米国のジュディ・クヒーガン氏が、事務局長には中国よりベン・グー氏が推挙された。特に、アジアからの常任委員は歓迎され、欧米以外の文化圏からの新鮮な視点を目録分科会に持ち込んでほしいとの言葉とともに満場一致で承認された。また、一〇月に常任委員数が二名増加し、アジアからは、韓国のイ・ジュソン氏が新常任委員として加わり、二〇〇六年ソウル大会に向けての分科会の体制が整った。

ISBD、FRBRのレヴューグループ、ICABSの報告と続き、FRANARから報告とそれに対するコメントの要請があった。それぞれオスロ大会以後の活動予定についても報告した。各レヴューグループおよびその下部組織であるワーキンググループの活動内容は、現在、安定しているようで、常任委員会で討議されることはなかった。また、二〇〇五年後半に行われるIME・ICC（国際目録規則に関するIFLA専門家会議）カイロ会議の準備が

進んでいるとの報告もされた。

また、目録分科会活動計画二〇〇五―二〇〇七（案）を検討した。同計画二〇〇四―二〇〇五から大きな変更はなく、案は承認された。

書誌分科会常任委員会

八月一三日、一九日の両日に渡って、開催された。目録分科会同様、新議長、事務局長が選出された。議長にはノルウェーのクヌトウセン氏が、事務局長には米国よりピーチャー・ウィギンズ氏が選ばれた。

書誌分科会活動計画二〇〇一―二〇〇四の達成度について意見を交わした。おおむね達成とのことで一致したが、新議長クヌトウセン氏より、後進国の全国書誌作成にかかわる援助の項目については成果がなかったとの異論が出た。二〇〇七年ダーバン大会に向けて分科会の課題となる。

書誌調整部会オープンセッション

八月一七日は、朝八時三〇分から夕刻六時まで、書誌調整部会および同部会を構成する四分科会（書誌、目録、分類・索引、知識マネジメント）中、三分科会（書誌、目録、分類・索引）のオープンセッションが連続して開催され、書誌・目録漬けの一日となった。

書誌調整部会オープンセッションでは、部会、分科会それぞれでの議長からの活動報告があった。さらに、FRAN

AR、FRASAR、UNIMARC、ICABSからの報告が続き、書誌調整部会のかかわるさまざまな活動が、すべての参加者に対してわかりやすく解説された。最後に、開催国ノルウェーのクヌトウセン氏が北欧諸国における書誌調整の現状について発表を行い、開催地の地域性を大切にするIFLAを印象付けた。

分類・索引分科会および目録分科会合同オープンセッション

テーマを「目録と主題における国際協力—グローバルアクセスの時代に」と設定し、複数の言語または複数の国家、地域をまたがり、典拠（名称および主題）構築を行った事例について、欧米各国から五件の発表を集めた。どの発表も実例が基になっているため、参加者の関心は高く、しばしば制限時間一杯までの質問があった。

その他、有識者によるパネルディスカッションと、FRANARに関する現状報告が行われた。

書誌分科会オープンセッション

テーマを「全国書誌—新しい媒体への対応、新しい環境への挑戦」と北欧で行われるオープンセッションにふさわしく設定し、四件の報告が行われた。おもな内容は、電子媒体を含む全国書誌に向けての調査レポート、その現況報告であった。

知識マネジメント分科会オープンセッション

書誌調整部会の他の分科会とは異なる八月一五日に単独で開催された。テーマを「知識マネジメント—将来への応用」とし、五件の発表があった。主に、図書館運営、人事マネジメントに関する発表内容であった。組織内での情報共有の重要性が主に語られた。

ICABSオープンセッション

八月一八日開催。ICABSを構成する六つの国立図書館から、「デジタル化された資料へのアクセスを保障するには」をテーマに、各館の行っている活動についての報告があった。

所感

書誌作成が、一組織、一地域、一国内を超えて行われることは常識になりつつあり、欧米各国において既に各種の試みが行われていることが実感できた。今後、日本においても、どのような取り組みを始めることができるのか考えてゆくことになるであろう。

なお、IME-ICCが、新しい「国際目録規則」の制定に向け、活動を続けているが、二〇〇五年カイロ会議は、IFLA大会と時期をずらして、二月二二日から一四日にかけて行われた。

(いなほまみのる 書誌部逐次刊行物課課長補佐)

発足五〇周年を迎えて——歴史に学び、未来を拓く

村山 隆雄

筆者は、子ども・ヤングアダルト図書館分科会（以後 SCL）の常任委員の佐藤尚子国際子ども図書館児童サービス課長の代理として、同分科会に出席した。本稿では、SCL常任委員会を中心に報告する。

IFLAブリュッセル大会（一九五五年）において、IFLA公共図書館分科会は、児童に関する図書館業務委員会（CHIFLA）を設置した。SCLはそのCHIFLAをもって嚆矢としており、今年には、SCL発足五〇周年にあたる。SCLはその記念事業として、記念リーフレットの作成、公共図書館分科会との共催によるプレコンファ

催のSCL分科会オープンセッションにおけるミニ展示会に取り組んだ。八月一八日の評議会では、IFLAニューズレターの優秀賞の発表が行われたが、SCLニューズレターが最優秀賞を受賞し、発足五〇周年に花を添えた。

SCL常任委員会

常任委員会は、八月一三日、一五日、一九日に、オスロ会議センターやラジソン・ホテルを会場にして開催された。今年には、SCLの役員改選期にあたり、委員長には、I・ストリセビック氏（クロアチア）、事務局長にはI・ボン氏（オランダ）が賛成多数で承認された。会計はN・デアマン氏（フランス）、広報は、前任者のK・レイ・リン氏（シンガポール）に替わってI・チュウ氏（シンガポール）が指名を受諾した。チュウ氏以外は二期目となる。恒例の委員長報告はIFLANETに搭載予定ということで、詳しい報告はなかったが、スタヴァンガーにおけるプレコンファレンスに関して、SCLの常任委員一四名が参加したこと、会議はよく組織され好評であったとの報告があった。併せてストリセビック委員長は、プレコンファレンスは、国際的なレベルで児童サービスという共通のテーマに



表彰状を手にするストリセビック委員長（右）とリン氏

レンス「公共図書館は一般公衆の教育から何に向かうのか 大人・子ども・ヤングアダルトのための社会のパラダイスに向けての新しい戦略設計」（八月一〇日、一一日、ノルウェーのスタヴァンガー）の開催、八月一五日開

関心を持つ人々と、時間をかけて会うことができる唯一の方法である。しかし、数多く集まる発表ペーパーの査読と選定等、周到な準備が必要なので、三年後のケベック大会で、プレコンファレンスを開催したいと述べた。

今年のSCCLも、「赤ちゃん・よちよち歩きの子・家族・介護者のためのガイドライン」策定プロジェクトの承認、リンドグレン記念賞の推薦、「二〇〇五―二〇〇六戦略計画」等々、議題は盛りだくさんであったが、特筆すべき事項は、関連団体との新たな提携とソウル大会のプログラムの検討であった。

（関連団体との提携）

K・ラゼロカIFLA会長は、評議会における会長報告の中で、図書館だけではコミュニティ・サービスを達成できない。関連団体との提携模索は図書館協会にもあてはまり、国際レベルでは、なおその必要性があると述べ、先行して成果をあげているIFLAと国際出版連合（IPA）やブルー・シールドとの提携を例にあげ、新たに、国際読書協会（IPA）と国際児童図書評議会（IBBY）との提携の合意に達したと報告した。同様に、児童サービスは、分科会だけでも公共図書館、読書、学校図書館、視覚障害者等と関係が深い。既に提携しているアストリッド・リンドグレン記念賞（スウェーデン国家文化協議会）に加え、今後の国際的提携のモデルケースとして、SCCLと国際児童デジタル図書館（ICDL）との提携が提案され、承認

された。ICDLは、メリーランド大学とインターネット・アーカイブが進める世界各国の児童書一万タイトルの電子化を目標にしている計画である。メリーランド大学のA・C・ウィークス氏から、各国の児童書電子化への協力要請があった。活動状況や電子化された児童書をICDLのウェブサイトで (<http://icdlbooks.org>) と見ることが出来る。(二〇〇六年ソウル大会に向けて)

来年のソウル大会では、読書分科会と合同でセッションを開催することが決まっているが、八月一日、両分科会の合同ワーキンググループは、プログラムの検討を行い、八月一九日のSCCL常任委員会で報告された。テーマは、ソウル大会のテーマに沿うもので、「ダイナミック・エンジンとしての図書館―人と読書の掛け橋―である。合同分科会にすることにより、単独開催の倍の四時間を使うことができる。提案されたプログラムは次のとおりである。

- ① 各国のファミリー・リーディングの現状
- ② ファミリー・リーディングを支える公共の政策・世界の状況
- ③ 世界のファミリー・リーディング研究

④ 世界のファミリー・リーディング最良の実践報告
SCCLはアジア、ヨーロッパ、オーストラリアから、読書分科会はアフリカ、北米、南米から、それぞれ一つずつ報告することになった。アジアからは日本の文庫活動の報告をとの要望が出され、帰国後調整することになった。さ

らに、ストーリーテリング、音楽、ダンスをプログラムに付け加えることも了承された。また、韓国国立中央図書館から、来年五月に開館予定の韓国国立児童青少年図書館における特別プログラムの開催の提案がなされた。日本からは、ソウル大会を盛り上げるためのプログラムの一つとして、要望の強い国際子ども図書館や文庫活動を含む我が国の児童サービスの現状を見学するプロフェッショナル・ツアーを提案した。ソウル大会直後の実施を目指して、調整することになった。

子ども・ヤングアダルト図書館分科会オープンセッション

八月十五日、オスロ会議センターにおいて、SCCLオープンセッションが、「子ども・ヤングアダルトサービス」過去・現在・未来への旅」と題して開催された。定員三〇〇名ほどの会場はほぼ埋まり、五〇周年記念大会にふさわしい雰囲気であった。同時に、児童サービスに関連する領域の幅の広さと奥行きに、あらためて思いを馳せ、加えて、生涯にわたるリテラシーの最初のステージに携る各国の図書館員の情熱と志に触れるという貴重な機会ともなった。報告は次のとおりである。

報告(一)ノルウェーの公共図書館の現状とこれから(L・

H・インデルガード氏)

政府による児童書購入と図書館への配布計画や、少年

の読書と図書館利用について興味深い報告があった。報告(二)世界の児童サービス事例(I・ボン事務局長)

事務局長は、最良の実践例を、わかりやすい写真とその理由をあげて提供するよう呼びかけた。

報告(三)児童・青少年サービス分科会の歴史とこれから(I・ストリセビック委員長)

委員長は、五〇年の歴史を語るには、まだデータが不足しているとデータ提供の協力を呼びかけた。

終了後、コートデヴィヴォアールの見事な音楽パフォーマンスがあり、聴衆を魅了した。会場入り口では、五〇周年の記念行事として、各国の活動を紹介するミニ展示会が開



オープンセッションを終えて
(前列右端が筆者)

催された。一緒に参加した日本図書館協会児童青少年委員会の依田和子氏(今期からSCCL常任委員、「よこはまライブラリーフレンド」代表)と、持参した国際子ども図書館の案内パンフレット・ポスター・展示会目録や日本図書館協会のパンフレット等を展示し、好評であった。

(むらやま たかお

国際子ども図書館長)

終わりに——オスロからソウルへ



IFLAの旗にかざられたカール・ヨハン通り

すでに述べたように、オスロに続くIFLA大会は、来年、ソウル（韓国）で、「図書館—知識情報社会のダイナミック・エンジン」をテーマに開催される。IFLAが東アジアで開催されるのは一九八六年（東京）、一九九六年（北京）に続くもので、奇しくも二〇年毎となる。二〇年前の東京大会は、日本の図書館の国際化に期を画したと言われている。隣国で開催の来年のソウル大会もまた、私たちにとって国際交流の好機と位置付けられるのではないか。と言うのも日本の図書館

の活動は、言語の制約などもあり、残念ながら、世界にあまり知られていない。また世界の図書館活動に参画することも、現状では多くはない。それだけに、往來容易なソウルで開催される来年の大会に多くの日本の図書館人が参加し、自分たちの活動を

知ってもらうことが必要である。その努力は、同時に国際的な図書館振興に寄与することでもある。一方、無論、オスロ大会参加の私どもにとってそうであったように、大会で得ること、学ぶことは頗る多い。受信と送信、文字どおりの交流がソウルで幅広く行われることを、そして成果の大きい会議となることを期待したい。

（国立国会図書館IFLAオスロ大会派遣団）



オスロ・スペクトラム展示会場の韓国ブース

オスロ点描

音楽あふれる街

八月一四日の開会式は、グリーグ作曲「ペールギュント組曲」の「朝」で始まった。続く行事も音楽に彩られていた。一五日の夕刻、ノルウェー国立図書館の開館式典に際して、屋外で催されたレセプションでは、女性シンガー・ソングライターのライブがあった。一六日の文化の夕べは、オスロ近郊のノルウェー文化歴史博物館で開催された。国内各地から歴史的な建造物を移築し、展示している会場が、民族音楽有り、大道芸有りの一大野外劇場となった。「展示」のひとつであるスターヴ教会で行われた女性歌手による民族音楽は自身の声と足でリズムをとる無伴奏の独唱であったが、狭く、暗い堂内においても、その歌声はフィヨルドの清冷な空気を想起させた。文化の夕べの帰り道、時刻はとうに一時を過ぎていたが、通りのカフェは熱心なジャズファンで一杯だった。帰国を控えた一九日夜には、港の広場で「オスロ・ジャズ・フェスティバル」が開催され、遅くまで人の流れが絶えなかった。

(村山隆雄)

オスロの公共図書館

滞在中、公共図書館では、オスロ中央図書館とそのトリーショフ分館を訪問した。トリーショフ分館は、オスロの北部サグネ地区に位置している。人口は約三万。伝統的な産業の衰退に伴い、労働者の町から、ブルーカラーの経歴を持つ高齢者、アジア・アフリカからの移民、学生と若年層、高学歴のホワイトカラー層、高い割合のソーシャル・クライアントという複雑な人口構成となった。この状況にあった図書館政策を打ち出しており、特に、若い女性移住者に対するリテラシー教育や成人女性に対する会話に力を入れている。公開書架に占める児童書の割合はかなり大きい。また、「バリアフリー図書」の提供のほか、資料検索結果の音声化、点字化に加え、表示の拡大や色を使い分ける工夫もなされている。この分館は誰でもアクセスできる図書館を実践していた。

(村山隆雄)

オスロでみつけた日本語

初日の夜オスロに到着し、翌早朝、そこからさらに北のプレコンファレンス会場へ向かうために、またオスロ国際空港に来た。本屋で背表紙をながめながら時間をつぶしている

と、なんと日本語の本が私を手引きしているではないか。『北極光・白夜』を取り出してみる。真四角の小さな写真集で、オーロラや白夜の写真に古今の有名文学作品の一節が付してある。イブセンを初めとするノルウェーの作品の翻訳もあるが、多くは日本のもの。明け始めた暗い空、緑色に輝くオーロラの下に、たった一行「冬は、つとめて」。沈まぬ太陽を遠くに臨む湖の景色の左に、涼しげな夏を詠んだ一茶の句。長距離移動に疲れた体に沁み入るような美しい日本語と写真の競演であった。即座に購入したことは言うまでもない。

さて、大会期間中である。セッションの休憩時間や会議後のひとときに頭を休めた会場近くのヨングス広場は、私のオスロでのお気に入りの場所だった。広場に並ぶ露店は、曜日によって違いがあり、平日は野菜・果物と衣類、金・土はそれに華やかなアクセサリーが加わった。日曜日は全部お休みで、空いたスペースでは、近所の人たちが石畳に大きなチェス板を広げて、膝の高さほどのコマをかかえて対戦していた。この広場の片隅に、小さなお石を一つ載せた台座がある。何かと思っ

て近づいてみると、石の右側に日本語が書かれている——これはヒロシマの爆心地にあった石です。左側はノルウェー語で、おそらく同じ説明がされているのだろう。思いがけない場所で、日本語に、そしてヒロシマに出会って驚いたが、聞けばノーベル賞のうち平和賞だけはストックホルムではなく、ここオスロで授与されるという。「なるほど」なモニュメントなのである。

(小林直子)

「ミニティン」で何だろう

ノルウェー議会議事堂を見学した際、その一角に「ミニティン」(Mintin)と呼ばれる児童教育施設が設けられていたのが印象的であった。この施設は、児童がタッチパネル画面でクイズに答えたり、ビデオを鑑賞したり、また模擬議会でロールプレイングを行ったりしながら、議会活動がどのようなかを自然に体験できるように構成されている。指導員、コンピューター・システム、施設が一体となった児童教育プログラムである。この議会シミュレーションの場に、常時児童を招いているとのことであった。このような施設は、北欧五か国に普及して

るとも聞いた。施設の説明をしてくれた指導員の方は、ここに来る子供達の中の何人かでも議会に興味を持ち、将来国の指導者となることを目指してくれることを願って子供達に接していますと語っていた。北欧の議会制民主主義の根の深さを感じた。(鎌田文彦)

トラムに乗らむ

ホテルと会議場やイベント会場との間の移動手段として、筆者が最も気に入っていたのは、「トラム」と呼ばれる路面電車であった。オスロ市内には、八系統のトラム路線があり、主要な場所にはトラムで行けるようになっていて、系統を間違えると、とんでもない方向に運ばれてしまうので、最初はガイドブックや停車場の案内図を見ながら、決死の思いでこれぞという番号のトラムに乗り込み、乗っ



たら乗ったで、降りる場所を間違えないように、これまた(たぶん)必死の形相で車内の停車表示をにらんでいた。しかし、さいわい

日がたつにつれて慣れ、街のたたずまいをゆっくりと車中から鑑賞する余裕も持てるようになった。

トラムの乗り降りのルールが、最初は分からなかった。乗客は好きなドアから勝手に出入りしている。運転手が乗車券や料金をチェックしているわけではない。最初にトラムに乗ったときに、隣の人に聞いて、車内のあちこちに設置されているスタンプ機に乗車券を差し入れて、自分でスタンプを押せばよいと教えてもらった。すなわち、料金については、完全に「自己管理(?)」である。ガイドブックには、時々抜き打ちの検札があり、乗車券を持っていなかったり、スタンプを押していなかったりした場合は、高額な罰金が科せられると書いてあった。もちろん、そのような検札は、筆者の滞在中は見かけなかった。市民の良識を前提とする「オトナ」のシステムという感じがした。

(鎌田文彦)

カール・ヨハン通り

カール・ヨハン通りは、実に気持ちのいい坂道である。毎日のように、この通りを歩いて会場に向かった。帰り道では

子ども連れの夫婦によく出会った。赤ちゃんやけに多い街だと思った。ノルウェーの人口は約四六〇万人、首都オスロの人口は約五二万人である。九〇年代半ばから人口増に転じているが、移民数の増加によるものである。出生率は高くない。また、長寿国でもある。子育て支援のための環境の整備を進めているせいであろうか。通りには、NoriやTANUMといった大きな書店がある。リンドグレンはスウェーデンの人であるが、児童書のコーナーでは、赤い背表紙の「アストリッド・リンドグレン著作集」が目立っていた。ノルウェーの新学期は八月中旬に始まる。書店は、学生や親子連れで、結構繁盛している。通りでは、学生たちが、屈託のない笑顔で、書店のまん前に自分達のお古の教科書を並べ売っていた。近くにあるオスロ大学の学生たちであろうか。書店としては苦情のひとつもいいたかろうと思っていたが、翌日「店」は出ていた。伝統行事らしい。何とも大らかな風景であった。八月半ば午後八時。外はまだ明るい。通りのカフェは西日を浴びながらつかの間の夏を謳歌する人々で賑わっていた。

(村山隆雄)

小さな芸術？

どこの街にもある壁の落書き。こざれいな雰囲気のおスロにもあるのかなと、道に迷って裏通りを歩いてみるとありまじく。どこか日本のものと似たタッチ(写真)をご覧ください。



(稲濱みのる)

「人」優先

天候に恵まれたこともあり、ホテルから会議場まで、しばしば徒歩で往復した。この往復で驚いたことは、信号である。どうも信号の意味がここでは違うらしい、と気がついた。青信号が「さあ渡って」のサインであることは万国共通である。一方、赤信号はと言えば、オスロでは「止まって待って」ではなくて「注意して渡ろう」。信号が赤の場合、歩行者は、右・左をみて車が近くに来てなければ横断する。まあここまでは、他の国でも見られる。オスロが違うのは、そこで車が近づいてきても、歩行者はゆっくり堂々と横断歩道を渡ることだ。そこで小走りになるのは日本人の私ぐらい。車の方も速度を緩めて人が

渡り終えるのを待ち、決してクラクションを鳴らして人を急がせたりしない。しばらくして納得したのは、ここオスロでは道路が歩行者つまりは「人」を中心に組み立てられている、という単純なことだった。「車」優先では決まてない。そう考えると、この町にはほかにいろいろと思いつたことがある。例えば、デパートなどの閉店時間。ホテルや飲食店を除くと、オスロではどこも夕方五時が普通である。その日の日程のあとで、何かお土産でも、と旅行者が物色するには、不便極まりない。仕事のあとで買物する市民はどうするのだろうか。ここでも、「うーむ」と考え込んだ。そして結局、店で働く人々の暮らしが、五時閉店によって維持されているのだ、と得心した。仕事のあと、家に帰って家族揃っての夕食・団欒がある。そのためには店は五時に閉める。買い物する側からは不便でも、それが当たり前なのだ。私たちの当たり前とオスロの人々の当たり前が、食い違っている。それは言い換えれば、暮らしの重心の置き方が違うということだろう。深く考えさせられることである。

(安江明夫)

オランダ王立図書館 (Koninklijke Bibliotheek) との協定の締結について

オランダと日本の交流関係は長い歴史がある。また、オランダに多くの学術出版社があることは、当館を含め我が国の図書館界ではよく知られている。

このような両国の国立図書館の間の協力に関する「国立国会図書館と王立図書館との間の協定 (Agreement between The National Diet Library and The Koninklijke Bibliotheek)」が、ウィム・ファン・ドリメン (Wim van Drimelen) オランダ王立図書館長と黒澤隆雄国立国会図書館長により署名され、平成一七年八月二二日に締結された。協定は、まず、オランダ王立図書館と当館は多くの分野で共通の関心を持ち、双方とも以下のことを目的とした戦



オランダ王立図書館外観

- 略を策定しているとする。すなわち、自館の蔵書および目録へのアクセスの拡大、デジタル遺産の保存、自国の紙媒体遺産の保存である。こうした共通の目的のために、この協定では次のことに同意がなされた。
- ・ 強固な実務的協力関係を築くこと。

- ・ 特に前記の三分野において情報および経験を共有すること。
- ・ デジタルドキュメントへの長期アクセスとその保管に関する解決法の共同開発を促進すること。

次にこれらの目標を達成するため、両館は、主要な分野において連携協力を進めるために担当する職員を指名すること、および戦略計画や年次報告書等の基本文書を交換することをこの協定で合意した。すでに両館は双方の担当職員を通知し合った。今後は、協定の趣旨に則して交流、協力を進めていくこととなる。

なお、本協定は締結日から四年間効力を有し、その後は結果についての評価を行う予定である。

オランダ・ハーグにある王立図書館は欧州図書館 (The European Library) の事務局を務めており、また IFLA (国際図書館連盟) 本部に施設を提供している。ヨーロッパの国立図書館界の中で図書館協力の核として活躍してきており、電子情報の保存についても国際的なリーダーシップの一翼を担っている。このようなオランダ王立図書館との協力は当館にとっても得るところが大きいと考えている。

(総務部支部図書館・協力課)



平成一七年度都道府県及び政令指定都市議会事務局図書室職員等との連絡会議について



平成一七年一〇月二一日、国立国会図書館東京本館新館研修室において標記会議を開催した。この連絡会議は国立国会図書館法第二一条（図書館の組織及び図書館奉仕の改善につき地方議会を援助する）に基づき、地方議会の図書室および調査担当職員を対象として平成元年から隔年で開催しているものである。今回は三七の都道府県および政令指定都市議会事務局から四一名の参加があった。

まず、「議会事務局が利用できる国立国会図書館のレファレンス・サービス」と題して、兼松芳之主題情報部参考企画課情報サービス係長と板垣裕一調査及び立法考査局電子



情報サービス課情報システム係長が報告した。当館レファレンス・サービスの利用法、当館ホームページ上の各種レファレンスツール（一般的なもの・国会会議録等特に議会サービスに利用できるもの）を、パソコンを使用したデモもまじえて紹介し、参加者の関心も高かった。

次に「調査業務のヒント―情報収集から提供まで」と題して、岡村美保子調査及び立法考査局国会レファレン

ス課課長補佐が報告した。当館が国会向けに提供している調査サービスと一般のレファレンスとの違い、調査する上の注意点、調査の種類等について説明した。

懇談および意見交換では、上記報告の内容についての追加質問や、当館が国会向けに作成している「国政の論点」、国会会議録検索システム、資料分類法、資料廃棄基準についての質問のほか、各議会事務局の図書管理システム・貸出システムの紹介、司書有資格者がいない図書室での複写業務の実際などについて、活発に意見交換が行われた。

最後に、国会向けの調査サービスに必要な立法資料を収集・管理している調査及び立法考査局国会レファレンス課と、国内外の議会資料、法令資料、官庁資料等を所蔵する議会官庁資料室の見学を行った。

終了後のアンケートでは、当館ホームページ上で提供されているレファレンスツールの紹介が有用だったという多数の意見のほか、調査業務の位置づけが参考になった、他の事務局の状況がわかってよかった等の意見、調査業務にしばった研修の要望も寄せられた。これらの意見を参考に、今後実務者に役に立つ研修、相互理解の場としての連絡会議をより充実させていく予定である。

（総務部支部図書館・協力課）

平成一七年度国立国会図書館長と大学図書館長との懇談会について

平成一七年一月二日、国立国会図書館（東京本館）において、国公私立大学図書館協力委員会委員館および関係機関・団体の代表者を招請し、標記懇談会を実施した。

黒澤隆雄国立国会図書館長および土屋俊国公立大学図書館協力委員会委員長（千葉大学附属図書館長）（写真）からのあいさつの後、当館から三題、大学図書館から二題の報告を行った。

当館からは塚本孝総務部副部長



が「インターネット情報の収集・利用に関する制度化について」、植月献二同部企画課電子情報企画室長が「国立国会図書館のポータルと学術情報のアーカイブ」、岡田三夫主題情報部長が「科学技術関係情報の整備について」と題し、当館の最近の取組みについて報告した。

大学図書館側からは、笹川郁夫東京大学附属図書館事務部長が「書誌ユーティリティの現状と課題―学術

情報システムの将来」、仲野憲一千葉大学附属図書館事務部長が「大学における機関リポジトリの構築―千葉大学学術成果リポジトリ (CURATOR) 紹介」と題して報告した。

続く懇談会では、主にウェブアーカイビングの問題を中心に活発な議論が交わされた。大学図書館側からはインターネット情報の制度的収集について、収集保存すべき情報の価値判断やワンストップ・ポータルの実現可能性等について質問・意見があった。これに対して当館からは、権利者側や文化庁・法務省等、関係する機関に意見を求めつつ、インターネット情報の最大限の収集を目指していること、ポータルについては、当館にアクセスする利用者を当館の蔵書だけではなく、多様な情報に導くため、大学や国立情報学研究所等との連携が不可欠であると認識しているとの説明を行った。また、名古屋大学から、当館の協力も得て、本年八月に電子図書館国際会議を開催し、成功裏に終了したことの報告があった。また、今後、大学図書館と当館との協力・連携を更に具体的に進める必要性を双方であらためて確認した。

最後に安江明夫副館長があいさつし、懇談会を終了した。

（総務部支部図書館・協力課）



本屋にない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介いたします。

カステラ読本 復古創新 福砂屋

カステラ本家福砂屋刊 (〒850-0904 長崎市
船大工町三番一号) 二〇〇五・一
一八七頁 B5 (DL698-H38)

「鶏卵一〇個、砂糖六〇〇グラム、小麦粉
六〇〇グラム」

この材料からどんなお菓子が出来上がるか、
想像してみてほしい。

これは『南蛮料理書』（成立年次推定
一六〇〇年頃・筆者不詳）に記載されている
カステラ（かすてら）の材料である。た
だし、この材料と当時の技術では、現在我々
が口に入っているようなカステラを焼き上げる
ことは困難であるという。

南蛮菓子の代表格とされるカステラ。あの
甘みの深いふっくらとした黄色のお菓子が、
実は最初から今のような食感だったわけでは
ないことを知っている人は意外に少ないので
はないだろうか。

長崎の老舗福砂屋が今年一月に刊行した
『カステラ読本 復古創新 福砂屋』（以下本
書とする）には、カステラの出自を詳ら
かにするための数々の試みとその成果、そし
てカステラとともに発展してきた福砂屋の歩
みなどが綴られている。

カステラ研究について主に扱っているのは
前半の第一編「カステラ編」と題される部分
であるが、その記述によると、カステラの原
型と思われるものはイベリア半島に複数有り、
そのいずれも現在のカステラよりかなり硬い
食感のものだったようだ。当時の未発達な攪
拌技術や長期の航海に堪え得る保存食であっ
たことなどから類推されるその事実は、冒頭
に述べた『南蛮料理書』記載の製法にも符合
する。そもそも、西洋には「かすてら」と呼
ばれる食品は無い。日本に伝来した折にカス
テラ（カステイリーヤ）王国のお菓子として
その名が伝わったとする説や、あるいは製法
を尋ねた際に「お城（カステロ）のように高

く泡立てる」と教えられたことが命名の理由
であるとされる説など、その名の由来には諸説
があるが、いずれにせよ「かすてら」という名
が日本特有の呼び名であることは確実である。
この南蛮菓子の特徴は、材料に卵と砂糖をふ
んだんに用いていることである。天武天皇の
時代以降食肉が禁忌とされていた日本には鶏
卵を食す習慣はなく、製菓に使用する甘味料
も甘藷（あまぐら）と呼ばれる、つる草から
とったものが主流で砂糖はまだまだ貴重だっ
た。そんな当時の日本人には卵の風味も生地
の黄色も新鮮に感じられたことだろうし、何
よりその甘さは彼らを驚かせたことだろう。
カステラは伝来以降その名も味わいも、わが
国で独自の変化を遂げてきたが、その最大の
特徴は損なわれることなく現在まで伝えられ
ている。

本書では、その製法や味わいの変遷をQ&
Aやエッセイ風の考察、年表、図表などを交
えて読者に分かりやすく説明している。素朴
に思えてその実高度なQ&Aは、好奇心を刺
激されて思わず一気に読んでしまう面白さで
あるし、筆者がカステラへの思い入れを語り
つつ、伝来当時に思いを馳せて初めてカステ
ラを口にした日本人の心境を想像した考察は、

大げさではなく実感のこもった感動を伝えて
いる。

また、多くの記事がカステラの事跡を紹介
するとともに長崎の歴史を語っている点も特
筆すべきポイントである。国際貿易の拠点で
あり、キリスト教の布教基地でもあった長崎。
その歴史的背景を語らずしてカステラの普及
と発展を語ることはできないということだろ
う。古文書や町民の生活の記録に登場するカ
ステラの事例をいくつも取り上げ、時代ごと
のカステラの位置付けを考察した記述などは
切り口が新鮮で非常に興味深い内容となっ
ている。

後半第二編は「福砂屋編」と題され、前半
とは打って変わった社史的な雰囲気は一瞬戸
惑うが、内容を読めば前半のカステラ研究を
生かした構成となっていることが分かり、
「復古創新」の四文字が伊達ではないことを
感じさせる。

福砂屋は本書刊行にあたって様々な目的を
掲げている。研究成果の報告やカステラへの
興味の喚起などがその筆頭にあることはこれ
までの記述からお分かりいただければと思う。
私が最後に述べておきたいのは、その目的の
末尾に相互理解の一助とすることが添えられ

ていることである。現在の厳しい世界情勢を
憂え、それをカステラ伝来期の東西関係に擬
えて、交流とそれによる発展の可能性を示唆
しているのかもしれない。多少突飛にも感じ
られるが、単純なだけに真理に近いようにも
思う。異文化間の衝突がまた一つ解消された
時、今度はどんなお菓子が生まれるだろうか。
そんな想像にはロマンがある。

カステラを囲んで、たまには国際情勢を語
り合うのも良いかも知れない。年末はカステ
ラを手土産に旧友を訪ねることにした。懐か
しい味わいに、思いのほか話が弾むのではな
いかと期待している。
(大森 寿恵)

国立国会図書館の編集・刊行物

全国書誌通信 第二二二号 A4 三三頁

目録情報と個人情報について／国立国会図
書館「日本目録規則一九八七年版改訂二版

第二章 図書」和図書適用細則について／逐
次刊行資料の書誌データにおけるアクセスポ
イントの拡充および著者名典拠レコードとの
リンクについて／国立国会図書館「日本目録
規則一九八七年版改訂二版」第十三章適用細
則の改訂について

不定期刊 四八三元(目)

デジタル環境下における「L1」ドキュメント・デリバリーとその運用基盤

(図書館研究シリーズ No.38)

A4 二二三頁



国内公共図書館の相互貸借等に関する調査
報告書―国立国会図書館総合目録ネットワ
ーク参加状況調査のまとめ―／総合目録の現
状と今後の方向性―第二回総合目録ネット
ワーク参加館フォーラム講演―／デジタル時
代のドキュメント・デリバリー・サービシ
・ビジョンと戦略―平成一六年度国立国会図
書館国際セミナー記録集―

『図書館研究シリーズ』は、これまで旧図書館研究所が発行してきましたが、当館の組織再編に伴って、今号から関西館事業部図書館協力課がこれを引き継ぎ、装いも新たにお届けします。

今号は、デジタル化の進行に伴い、ILLやドキュメント・デリバリー・サービスはどのように変化していくべきかという点に注目し、これに関係する報告、セミナー記録を収めたものです。国立国会図書館総合目録ネットワーク事業の目的のひとつである「公共図書館の県域を越える全国的な相互貸借の支援」に着目した総合目録と相互貸借の関係の実状についての考察、同事業の一環として平成一七年二月に行った講演の記録、平成一五年度・一六年度の二か年にわたって実施した「電子情報環境下における科学技術情報の蓄積・流通の在り方に関する調査研究」の一環として、平成一六年一二月に開催した国際セミナーの記録を収録しています。

カレントアウェアネス 二八六号

A 4 三〇頁

インド洋大津波による図書館、文書館被害

二、一〇〇円 (白)
(ISBN 4-8204-0324-1)

と今後の課題／新しい国際目録原則に向けて／「子どもをインターネットから保護する法律」合憲判決と図書館への影響／図書館長のリーダーシップのあり方を巡る世代間議論／図書館へのRFID技術の導入をめぐる／オーストラリア国立図書館における資源共有へ向けての新たな取組み／ショッピングセンターと公共図書館
〈動向レビュー〉新聞資料のデジタル化をめぐる動き／韓国における図書館情報政策の動向／場所としての「図書館」をめぐる議論
〈研究文献レビュー〉図書館の経営評価に関する日本国内の研究動向

季刊 四二〇円 (白)

レファレンス 第六五八号 A 4 一二一頁

生命科学技術と立法／ロシア経済の現状と展望／公務員制度改革／ヨーロッパの高等教育改革／イギリス教育改革の変遷／オーストラリアにおける高等教育費用負担制度の最近の動向

月刊 税・送料込み 八三三円 (有)

NDL CD-ROM Line

点字図書・録音図書全国総合目録

二〇〇五年一月号

(一九八〇年以前) 二〇〇五年九月収録

参加館は二三一館(当館、八八点字図書館、一四二公共図書館等)。年二回更新。収録レコード数三一八、二八〇件。

年間契約価格四二、〇〇〇円 (白)
初年度のみ六三、〇〇〇円(検索ソフト込み)

入手のお問い合わせ

日本図書館協会 〒104 東京都中央区新川一丁目一四

(有) 有隣堂印刷(株) 〒140 東京都品川区南品川六丁目二〇

特に記載のないものは税込価格です。

遠客近客

(東京本館)

七月五日 北京大学国際関係学修士課程大学

院生一七名

七月五日 デイアナ・マーカム氏 (米国議会

図書館副館長)

七月五日 リュウ・ウェンリン氏 (米国・イ

ンディアナ大学図書館司書)

七月五日 カール・デイトトリッヒ・ヴォル

フ氏 (ドイツ・シュトレームフェルト出版

社)

七月六日 座間市立図書館ボランティアの会
一四名

七月一日 イスマイル・アラユジュ氏（トルコ文化観光省）

七月二三日 文部科学省・筑波大学共催大学
図書館長期職員研修四二名

七月二五日 スミコ・トガサキ氏（米国・サ
ンノゼ州立大学図書館情報科学学部）、タ
ミヨ・トガサキ氏

七月一九日 ブロール・トロンバッケ氏（ス
ウェーデン・やさしく読める図書基金所長）

七月二二日 東京都立中央図書館長一行三名

七月二八日 イ・スラン氏（韓国・サムス
ン経済研究所司書）

八月二日 日本大学図書館業務研究会二一名

八月四日 フランツ・D・ホファー氏（米国・
コーネル大学院歴史学専攻）

八月九日 長野県立図書館協会大学専門部会
九名

八月二二日 韓恵氏（中国国家図書館）、羅
敏氏（中国国家図書館）

八月二二日 ティア・セアンホーン氏（カン
ボジア日本協力センターライブラリーマネー
ジャー）

八月三〇日 フランシス・カパロ ケニア国
会議長一行一〇名

九月五日（九月） コラード・モルテーニ氏
（イタリア・ミラノ大学教授）

九月八日 市川市図書館友の会二二名

九月二二日 韓国国立図書館員二二名
セルゲイ・ポノマリョフ氏（ロ
シア・サハリ州議会議員）

九月二六日 クリスティン・フレッチャース
ピア氏（米国・アリゾナ州グレンデール
公共図書館司書）

九月三〇日 私工大懇話会図書館連絡会実務
担当者会議一四名

七〜九月には、このほかに、学校関係九件
九九名、大学関係（司書課程等）三件四五名
その他六件二八名の見学・参観を行った。

見学・参観の申込み
詳しくは左記にお問い合わせください。

国立国会図書館資料提供部
利用者サービス企画課総括係
☎〇三（三五八一）二三三二

内線二六一一
国立国会図書館関西館総務課総務係
☎〇七七四（九八）一二二四（直通）

国際子ども図書館企画協力課企画広報係
☎〇三（三二八二七）二〇五三内線二〇六

NDL news — 当館の最近の動き

韓国国立中央図書館開館六〇周年 記念シンポジウム

一〇月一八日、ソウルの同図書館にお
いて、「二一世紀の日録・全国書誌政策」
をテーマとして開催された。

韓国各地から参集した三〇〇人近い図
書館関係者に対して、米国議会図書館目
録政策・支援室長ティレット博士による
RDAとVIAFの現況報告を皮切りに
中国、日本および韓国から目録規則と全
国書誌に関する計八件の発表が行われ、
その後活発な質疑応答が行われた。当館
からは横山幸雄書誌部書誌調整課長補
佐が出席し、当館の目録サービスの現状
と課題について発表した。

会議の翌日には発表者と韓国国立中央
図書館職員による業務交流が行われ、目
録業務の外部委託、典拠コントロール、
文字コード等について熱心な意見交換が
なされた。

なお、会議の発表内容等は、同図書館
のホームページで公開されている。（http:
//www.nl.go.kr/symposium/eng/）

* RDA (Resource Description and Access)

欧米圏の標準目録規則であるAACR2の全面改訂版として、二〇〇八年の完成を目指して検討中。

* V I A F (Virtual International Authority File) 本誌五三二号(二〇〇五年七月)を参照。

「デジタル文化遺産の保存 — 原則と方策」国際会議

平成一七年一月四日および五日、オランダ・ユネスコ国内委員会およびオランダ国立図書館主催の標記会議がハーグ(オランダ)で開催された。四四か国から一三三名が参加し、当館からは竹鼻和夫関西館事業部電子図書館課主査が出席した。

この会議では、二〇〇三年のユネスコによる「デジタル文化遺産保存憲章」策定以降焦点となっている、(一)保存されるべき電子資料の選別について、(二)保存を行う組織間の役割分担について、それぞれをテーマに議論された。

この会議を受け、デジタル文化遺産に対する役割と責務についての勧告が行われる予定である。

安全運転に対する職員の表彰について

秋の全国交通安全運動に伴い、一月七日、総務部会計課の猪狩光一参事が警視庁交通部長から長期無事故金章、同課の浅沼信司参事が同じく長期無事故銀章を贈られて表彰を受けた。また、同課の本間秀樹参事が麹町警察署長から表彰を受けた。

「関西館見学デー」の実施

平成一七年一月二〇日、当館関西館で



は館に対する近隣の理解を深めるため、昨年度に引き続き、立地する精華町が中心となって開催される「せいか祭り二〇〇五」に合わせて、「関西館見学デー」を実施した(写真)。普段は休館日である日曜

日に閲覧室を一般に開放するもので、今年度は閲覧室全域に案内員を配置したほか、電子図書館サービスのデモンストレーション、ビデオ上映も行った。日頃は入館できない子どもたちの姿も見られ、特別展「描かれた動物・植物」江戸時代の博物誌」を開催していたこともあり、来館者総数は九二〇人にのぼった。

第七回図書館総合展

平成一七年一月三〇日から二月二日まで、パシフィコ横浜展示ホールで第七回図書館総合展が開催された。当館は、展示に参加したほか、「時空を超えて知の社会基盤の構築へ」と題したデジタル情報のアークイブ構築に関するフォーラム(講演会)、「国立国会図書館ホームページから利用できるレファレンス・ツール」のプレゼンテーションを行った。



毎朝、集配センターに積み上げられる資料の山、やま、ヤマ。国の内外から押し寄せる膨大な資料。それらを手際よくさばっていく職員たち。さらにこの他にも、さまざまなルートでさまざまな資料が日々届けられています。

国内の出版物すべてについて、納本の義務が定められている納本制度。

この制度が周知されているおかげで、各地から国立国会図書館へと出版物が送られて来るのです。

しかし、本当に誰もが知っているでしょうか？ そしてあらゆる出版物が集まっているのでしょうか？ もしそう信じている方がおられるなら、それは少し事実と違う認識かもしれません。

たとえば、インターネットによるIT革命の現在、利用できる出版情報は星の数ほどあります。しかも、納本対象は一九四八（昭和二三）年以降の全出版物ですからこれもまた膨大な数なのです。結果として多くの「洩れ」があり、今も発見され続けています。これは

「制度と実態のズレ」というべきものでしょう。

内外から所蔵をリクエストされる資料、自分たちで掘り起こす情報。それら一つひとつのデータを丹念に検証して、あるものは郵送で、またあるものは直接に電話で、「納本のお願い」をくりかえす毎日です。

この電話による依頼が、もっとも緊張する瞬間かもしれません。しかも当然ながら、こうした業務は、いつも良い結果につながるとは限りません。落ち込むこともしばしばなのです。

このように国内資料課の仕事は、各種の広報活動により納本制度をより多くの方にご理解いただき、より多くの出版物を当館に納本していただけるよう努

めることです。

わたしたち「納本調査隊」は、まだ見ぬ資料を、国民の「文化財として永久保存」していくために、今日もまた励んでおります。

（収集部国内資料課

悩みつきない一隊員）



常設展示のお知らせ

第一四一回 なるふる

— 地震を科学する —

平成一八年一月一九日（木）から

三月一四日（火）まで

於 本館二階第一閲覧室前（東京本館）

最近、地震関連のニュースがよく聞かれます。次々と売り出される防災グッズや対策本などに象徴されるように、東海地震や首都圏地震への関心も年々高まっているようです。

日本人は昔から地震とともに暮らしてきました。古代においては、地震は「なるふる」と呼ばれ、地震が起こることを「なるふる」と表現しました。日本での最も古い地震の記録は、『日本書紀』にある允恭天皇五年（四一六）七月一四日に起こった地震についてのものであるといわれています。

そんな日本で、地震が学問として研究されるようになったのは明治時代。その後、地震はどのように解明されてきたのでしょうか。

今回の展示では、日本での地震学の誕生から今日までの歩みを、皆さんと一緒にたどってみたいと思います。

レファレンス協同データベース事業 データ作成・公開に関するガイドラインの策定について

レファレンス協同データベース事業は、全国の図書館が、レファレンスサービスの記録や、情報の調べ方の案内などをデータベースに登録し、インターネット上で公開することにより、図書館のレファレンスサービスと、一般利用者の調査研究活動を支援する事業である。

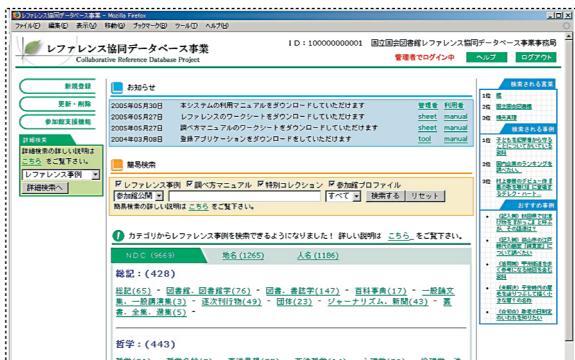
このたび、レファレンス協同データベースを一般公開するに先立ち、「レファレンス協同データベース事業データ作成・公開に関するガイドライン」(以下「ガイドライン」という。)を策定した。これは、データを作成・公開するにあたっての指針を示したものである。

ガイドラインは、この事業の参加館のために策定したものであるが、同時に、自館のレファレンスに関する情報を、広く一般に提供している他の図書館にとっても、参考にしていただけるものである。

一、策定の背景

レファレンス協同データベースは、平成一六年四月、参加館に限定して公開し、現在までに一万八、〇〇〇件を超えるデータが蓄積されるに至っている。しかし、レファレンスサービスを支援するためのデータベースとしては、デー

タの数、品質ともに、まだ課題が残されているというのが実情である。



「レファレンス協同データベース」トップページ

レファレンスサービスは、図書館の館種、規模、蔵書などの要素によって違いがあるものであり、また、利用者のニーズも、館により様々である。データの作成・公開においても、参加館のとらえ方に多様性があることが、これまでのデータの蓄積により明らかになっており、データベースをより有効なものにしていくため

には、参加館の認識を共通のものにする必要があった。

また、レファレンス協同データベースの一般公開を控え、データ作成・登録の効率化を図る観点から、データの記述の仕方や公開の判断について参考となる、指針のようなものが必要であるとの要望が、参加館から寄せられていた。ガイドラインは、以上のような背景から策定された。

二. 検討会議の設置

平成一七年六月、ガイドラインを策定するにあたって、「事例データ作成・公開に関するガイドライン策定検討会議」を設置した。ガイドラインが実務担当者にとって役立つものとなるように、この会議には、図書館情報学の研究者のほか、各館種の参加館からレファレンスサービスに造詣の深い方々にご参加いただいた。会議の座長は、事業開始当初から様々なアドバイスをいただいている、青山学院大学の小田光宏教授に引き受けていただいた。

ガイドライン策定検討会議メンバーは左記の七名である。

小田光宏	青山学院大学教授(座長)
福田 求	獨協大学助教授
山崎博樹	秋田県立図書館
齋藤誠一	立川市中央図書館
井上真琴	同志社大学総合情報センター
酒井由紀子	慶應義塾大学信濃町メディアセンター
石渡裕子	当館主題情報部

ガイドラインの原案を作成するため、会議を六月から九月にかけて三回開催し、また、会議を補足するためのメールによる意見交換も、精力的に行われた。作成された原案については、九月一五日から三〇日まで参加館に対し意見公募を行った。以上のような経過を経て、一〇月一四日、ガイドラインが完成した。

三. ガイドラインの構成

ガイドラインは、本文五章と付録資料から成っている。作成にあたっては、特に読みやすいものであることを重視した。そのため、本文と詳細解説を分けて記述するなどの工夫をしている。

第一章、第二章では、参加館が協同してデータベースを構築していく上での基本的な考え方を示している。

第一章「ガイドラインの趣旨を理解するために」では、事業とレファレンスサービスとの関係、事業の意義およびガイドラインの目的、位置付けについて解説している。

第二章「レファレンス協同データベースの概要を知るために」では、データベースの構造と用途を示している。

第三章、第四章は、実際のデータ作成とデータ公開の判断の参考になる章である。

第三章「データを作成するために」では、データ・フォーマットの構造や、データのもととなる情報源、データの各項目の記入の必要性など、データ作成にあたって必要な事

項を詳細に解説している。

第四章「データを公開するために」では、データを公開するにあたって何を知っておくべきか、公開してはならないデータとは何か、公開の条件とはどのようなものかについて基準を示している。

第五章「データの質をさらに高めるために」では、データの質を高めるポイントや、コラボレーション機能の活用の仕方、検索機能の活用について記述している。第一章から第四章までをふまえた上で、より良いデータの作成を目指すために役立つ内容となっている。

付録資料として、各データ項目の解説や公開基準を一覧表にしたもの、およびデータの解説付きサンプルを掲載し、実務担当者の利便性に配慮している。

今回策定したガイドラインは、今後、参加館で実際に活用していただいた上で、その評価をふまえて、改訂を行っていく予定である。参加館はもとより、まだ参加されていない図書館、また、レファレンスに興味をお持ちの方にもご一読いただき、ご意見をいただきたい。

ガイドラインは、レファレンス協同データベース事業ホームページの左記のアドレスに全文を掲載している。

<http://crd.ndl.go.jp/jp/library/guideline.html>

(関西館事業部電子図書館課)

「レファレンス協同データベース」を公開しました

これまで事業の参加館に限定して公開していたレファレンス協同データベースを、平成17年12月15日に、一般公開しました。下記アドレスからアクセスできます。どうぞご利用下さい。

レファレンス協同データベースのアドレス <http://crd.ndl.go.jp/public/>

※ 国立国会図書館のホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) の、「テーマ別調べ方案内」または、「図書館員のページ」からもアクセスできます。

収録されているデータ

- | | |
|----------------|------------------------------------|
| • レファレンス事例データ | 参加館で行われたレファレンスサービスの記録 |
| • 調べ方マニュアルデータ | 特定のテーマやトピックに関する情報資源の探索方法を説明した情報 |
| • 特別コレクションデータ | 個人文庫や貴重書など、参加館が所蔵する特殊なコレクションに関する情報 |
| • 参加館プロフィールデータ | レファレンス協同データベース事業の参加館に関する情報 |

第二回 レファレンス協同データベース・システム研修会開催

レファレンス協同データベース事業の参加館に、データの作成、公開に関する理解を深めてもらうことを目的として、平成一七年一〇月二〇日、関西館において、第一回レファレンス協同データベース・システム研修会を実施した。参加者は、事業の参加館職員三三名である。

午前の部では、データ登録についての協力のお願いと、事業の現状、およびレファレンス協同データベース・システムの機能と操作方法についての説明を行った。

午後の部では、ガイドライン策定検討会議の座長である小田光宏氏が『レファレンス協同データベース事業データ作成・公開に関するガイドライン』についてと題して講義を行った。主にガイドラインの第三章、第四章、第五章を中心に、品質の高いデータを作成するためのポイントと、データ公開にあたって配慮すべき点について、分かりやすく解説された。また、参加者が事前課題として作成したレファレンス事例デー

タに対し、個別にアドバイスをを行うことによって、ガイドラインの趣旨をより具体的に説明した。

その後、「参加館におけるレファレンス協同データベースの活用と今後の取組みについて」と題して、参加者によるグループ討議を行った。コーディネーターは、講義に引き続き小田氏が務めた。

討議の中で、活用に関する課題としては、データを作成する時間の確保が難しいこと、業務の中で、データの活用がまだ不十分であることなどが挙げられた。それに対する取組みとしては、レファレンス記録票を工夫してデータ作成時間を短縮すること、データベースに容易にアクセスできるよう、各館の業務用端末にデータベースのアドレスを登録しておくこと、館内研修を実施すること、などが提案された。

*この研修会の記録は、レファレンス協同データベース事業のホームページ (<http://ord.ndl.go.jp/pp/library/>) に掲載しています。

公開シンポジウム

デジタル時代における図書館の変革 — 課題と展望 —

国立国会図書館は、平成14年度以降、電子図書館サービスを開始し、その拡充に努めてきました。現在、ウェブアーカイブの法制化、電子図書館中期計画2004に基づくデジタルアーカイブの構築等、新たな段階に入るところです。転換期を迎えるこの時期に、内外の著名な図書館関係のかたがたに、デジタル社会における図書館の役割を報告していただき、またパネルディスカッションを行います。当館からは、デジタルアーカイブ事業の成果と今後の展望について報告します。皆さまのご参加をお待ちしております。

日 時：平成18年1月26日(木) 11:00～17:00 (10:30受付開始)

会 場：国立国会図書館東京本館 新館講堂

プログラム

【午前】	講演「情報社会と UNESCO の戦略」(仮題) アブデルアジズ・アビド (UNESCO 情報社会部プログラムスペシャリスト) 講演「デジタル情報の潮流と図書館の在り方」(仮題) 松村多美子(図書館情報大学名誉教授)
【午後】	講演「新しい情報環境における英国図書館の挑戦」(仮題) リン・ブリンドリー(英国図書館館長) 当館報告「デジタルアーカイブ構築に向けた国立国会図書館の取り組み」 植月献二(国立国会図書館総務部企画課電子情報企画室長) パネルディスカッション テーマ：「情報の流通とアクセス—これからの図書館をめぐる—」 パネリスト：岡本 真(Academic Resource Guide 編集者) 高野明彦(国立情報学研究所ソフトウェア研究系教授) 常世田良(日本図書館協会事務次長) 長塚 隆(鶴見大学文学部教授) 山崎久道(中央大学文学部教授) (五十音順)

申込方法：E-mail アドレス t-sympo@ndl.go.jp へてに (1) 氏名、(2) 所属、そして「公開シンポジウム参加希望」とご記入のうえ、平成18年1月20日(金) までに申し込んでください。参加証等はありませんので、当日直接会場までお越しください。ご参加いただけない場合のみ連絡させていただきます。参加費は無料です。

定 員：200名(先着順)

申込みは先着順で受け付けます。締切日前であっても、申込みが定員を超えたところで受付を終了いたします。ご了承ください。なお、受付の終了は当館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp>) でお知らせいたします。

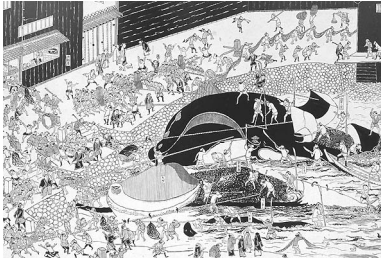
問い合わせ先：

国立国会図書館総務部企画課電子情報企画室 TEL 03-3506-3310 (直通)

電子展示会

「描かれた動物・植物－江戸時代の博物誌－」を完全公開します。

平成17年11月28日に終了した特別展示「描かれた動物・植物－江戸時代の博物誌－」で展示した当館の貴重な博物誌資料が、当館ホームページ上の電子展示会でご覧いただけます。



『勇魚取絵詞』文政12

12月1日、これまで公開していた簡易版を更新し、一部の重要な資料や美しい動物植物画などはすべてのページを見ていただくことができるようになりました。

特別展示にご来場いただいた方にもさらにお楽しみいただけるよう、当館の博物誌コレクションの紹介や博物誌に関するコラムを設け、動植物の名前や著者から資料を

探せる各種索引などの機能も充実させています。

江戸時代の人々が身近な動物や植物に向けた眼差しを、ご自宅のパソコンの画面を通して感じていただくことができれば幸いです。

<URL> <http://www.ndl.go.jp/nature/>

<問い合わせ先> 国立国会図書館関西館 事業部電子図書館課 電子情報発信係
電話0774-98-1490（直通）

「国立国会図書館資料デジタル化の手引き」を公開

平成17年11月18日、当館ホームページに「国立国会図書館資料デジタル化の手引き」(<http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/digitalguide.html>)を公開しました。

この手引きは、当館の所蔵資料をデジタル化する際に、実務担当者の役に立つデジタル化に関する基礎的な事項をまとめたものです。全体の構成は、次のとおりになります。各機関で実施される資料デジタル化事業においても、参考資料としてご活用ください。

手引きの構成

- 1 デジタル化の対象資料及びデジタル化の手順
- 2 デジタル化の技術
- 3 画像データの品質
- 4 画像データの管理
- 5 著作権処理

参考資料1 主な画像フォーマットの特徴

参考資料2 画像データの提供方法

参考資料3 デジタル化仕様書サンプル

(関西館事業部電子図書館課)

- ・消失：事故や災害によりデータ自体が消滅してしまう危険
- ・死蔵：機器やソフトウェアが旧式化し、データを再生できない危険
- ・散逸：データ自体はどこかに存在するものの、特定できない危険
- ・偽造：データ自体は特定できるものの、第三者により改変されている危険

デジタル形式でしか存在しないのですから、いったん消失してしまうと取り返しの付かないことになります。また、作成した本人がいくら丁寧に保管したとしても、数百年単位で保存することは不可能です。ですから、何らかの長期的にアクセスを保証する社会的な制度が必要になってきていると思われれます。当館は、情報資源に関する国の最後のよりどころとして、ポーンデジタル著作物の長期的アクセス保証の責務を負うことに名乗りを上げました（連載第13回）。デジタルデポジット事業と仮称し、現在実現に向けて取り組んでいます。諸外国に目を向けると、例えばオランダ王立図書館では学術電子ジャーナルの長期保存事業、ドイツ図書館でも以前から電子博士論文のアーカイブ事業が進められてきています。

<「著作単位」でのコレクション構築>

デジタルデポジットとウェブアーカイブは、デジタルアーカイブ計画を構成する事業で、互いに補完的な関係にあります。前者は著作単位でコレクション化を行う事業であり、後者はサイト単位でアーカイブしていく事業です。ここでいう「著作単位」とは、書籍や論文、あるいは記事など。紙の世界のアナロジーでとらえられる形態のデジタル資源を意味しています。デジタルデポジットは、既存の著作物がポーンデジタル化することへの対応と位置づけられます。一方の「サイト単位」とは、文字通りウェブサイトのこと。ウェブアーカイブは、ウェブという新たな文化、新たな形態・内容をもつ記録物を、サイト単位で時系列的に収集・組織化し、後世に残そうとするものです。

現在、想定している収集対象は、データベース等に集積されているデジタル著作物群、個人等により作成・保管されているデジタル著作物、あるいはウェブ上に散在しているデジタル著作物などです。具体的には、電子ジャーナル、電子書籍、論文・記事・報告書などのたぐいです。その多くは、アクセス制限が掛けられるなど機械的収集が困難な形態で流通していると考えられ、今後制度化することにより、あるいは個別に契約等を交わすことにより収集し、段階的にコレクションを構築していく予定です。また、海外のジャーナルに日本人研究者の論文の多くが投稿されていることや、最終的なよりどころとしてのバックアップの必要性などにかんがみ、海外学術電子ジャーナルを収集することも視野に入れていきます。これは、第45回科学技術関係資料整備審議会（本誌527号参照）でも提言されています。

デジタル資源の著作単位での収集・保存は、当館だけで達成できる課題ではありません。様々な利害関係者との協力、他の保存機関との分担、研究機関や民間企業との連携が欠かせません。

（総務部企画課電子情報企画室 しおざき りょう 塩崎 亮）



電子図書館サービスのページ

いつでもどこでもだれでも



デジタル資源を 著作単位で収集・ 保存する

【連載目次】

- 国立国会図書館の電子図書館サービスとは？ (523号)
- 一次資料の電子的提供 (524～527号)
- ウェブ・アーカイブと提供 (528号)
- 資料に到達するための情報 (529～531号)
- ホームページ (532号)
- レファレンス協同データベース事業 (533号)
- 電子情報の保存と利用保証 (534号)
- 電子図書館サービスの目標と今後 (535号)
 - ・ウェブサイトの収集・保存 (536号)
 - ・デジタル資源を著作単位で収集・保存する (本号)
 - ・情報資源に関する情報の充実：ナレッジデータベース (次号)
- ・デジタルアーカイブポータル

<架空のおはなし>

真理は社会人大学院で動物学を専攻中。レポート準備のため、20XX年に発表された電子書籍 "Introduction to Zoology" を探していた。しかし、すでに数十年前の作品だ。もはや販売されていない。インターネット上で流通はしているらしいが、本物かどうか特定できない。困った末、図書館へ相談することに。すると司書曰く「ああ、ご心配なさらずに。それでしたらここをお探しになれば……」。

— さて、いまから数十年後。デジタル形式の著作物をいつまでも見ることができるような社会環境は、果たして実現しているのでしょうか？ —

<ボーンデジタル化>

これまで図書館資料として扱ってきた資料の多くが、デジタル形式で作成され、無体物としてネットワーク上で流通するように変容しつつあります。今のところ、その代表例ともいえる学術電子ジャーナルの大半は冊子体でも刊行されていますが、一方で、生産から流通までデジタル形式のみでしか存在しない著作物（ボーンデジタルと呼ばれます）も増えつつあります。英国図書館の委託調査結果によれば、英国刊行単行書のボーンデジタル化率は、2020年までに約4割を占めるようになるとの予測 (<http://www.bl.uk/about/articles/pdf/epsreport.pdf>)。デジタル形式であれば、色々な面で利活用の可能性が広がるのは確かでしょう。しかし、無体のボーンデジタルになってしまうと複雑な問題が生じてきます。

一体、だれが、どうやって長期保存すればよいのでしょうか。

<デジタルデポジット事業（仮称）>

ボーンデジタル化した情報資源は次のような危険と隣り合わせだといえます。

国際子ども図書館 学校図書館セット貸出し

アジアセット（中国・東南アジア諸国）の貸し出し開始について

国際子ども図書館では、世界各国・地域の歴史や文化、生活等を紹介する資料、その国や地域で読まれている児童書等を40～60冊のセットにして学校図書館に貸し出すサービスを行っています。

現在貸し出し中のセットに加えて、平成18年1月から、「アジアセット（中国・東南アジア諸国）」の貸し出しを開始いたします。

詳細は、国際子ども図書館ホームページ（<http://www.kodomo.go.jp/>）をご覧ください。

問い合わせ先 国立国会図書館国際子ども図書館児童サービス課企画推進係
TEL：03-3827-2053（代表） FAX：03-3827-2043



国際子ども図書館展示会

「もじゃもじゃペーターとドイツの子どもの本」関連講演会

『もじゃもじゃペーター』は、1844年にドイツの医師ハインリッヒ・ホフマンがわが子のために作り、たちまちのうちに多くの国に広まった絵本です。国際子ども図書館では、平成18年1月28日から7月2日まで、3階本のミュージアムにおいて、この絵本を中心とした展示会を行います。会場等につきましては、本誌11月号または国際子ども図書館ホームページをご覧ください。

この展示会に関連して次のとおり講演会を開催いたします。

テーマ：「ドイツの子どもの本の歴史」

日時：平成18年2月4日（土）午後2時から

場所：国際子ども図書館3階ホール

講師：吉原 高志氏（本展監修者、関東学院大学教授）

内容：18世紀啓蒙主義の時代の子どもの本から、19世紀初頭ロマン派のグリムの昔話、そして『もじゃもじゃペーター』までのドイツの子どもの本の歴史を概観します。

対象：16歳以上

申込方法：直接来館、往復はがき、電子メール（事前申込制・先着順）

詳細は、国際子ども図書館ホームページ（<http://www.kodomo.go.jp/>）をご覧ください。

問い合わせ先 国立国会図書館国際子ども図書館企画協力課
〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49

お知らせ

年末年始の

サービス休止について

—各施設の休館期間—

東京本館

関西館

国際子ども図書館

平成一七年二月二十八日(水)

平成一八年一月四日(水)

右記の期間、来館による閲覧・
複写サービスを休止させていただきます。

右記の期間中も当館ホームページを通じてインターネット経由の資料検索や複写申込み等は休止いたしません。一二月二十八日以降に受理した申込みの処理は、一月五日以降となります。

お知らせ

東京本館および関西館の 資料整理休館日の臨時変更について

閲覧関係システム機器等のネットワークの移行作業に伴い、次のとおり、東京本館および関西館の資料整理休館日を臨時変更いたします。利用者の皆様にはご不便をおかけしますが、お間違えのないようお願いいたします。

変更内容

平成18年3月15日(水)は開館し、同年3月20日(月)を臨時資料整理休館日とします。

平成18年3月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

■ は休館日

お知らせ

NDL-OPAC に雑誌記事索引遡及データ追加提供

NDL-OPAC (<http://opac.ndl.go.jp/index.html>) では、現在約666万件の雑誌記事索引データを提供していますが、このたび『雑誌記事索引 科学技術編』の1972年から1974年のデータ、約18万件の遡及データが検索可能となりました。

『雑誌記事索引 科学技術編』は、1950年に『雑誌記事索引 自然科学編』の名称で刊行を開始し、1975年以降のデータはNDL-OPACで検索できますが、1974年までの約145万件のデータはデータベース化されていませんでした。今後も遡及入力を継続していく予定です。

お知らせ

新連載が始まります

— テーマは関西館の資料 —

来年1月から、シリーズ「関西館の資料」の連載を開始します。関西館に配置されている特色ある資料を、資料群ごとに詳細な説明を加えながら紹介していきます。

シリーズ前半では科学技術資料を中心に、洋雑誌、国内博士論文、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書を含めて紹介し、シリーズ後半ではアジア言語資料を紹介する予定です。

どうぞご期待ください。

第536号（2005年11月）の訂正とお詫び

巻頭記事のタイトル 3年目 → 3周年

6頁上段11行目 平成17年3月 → 平成16年12月

お詫びして訂正いたします。

	526 ①	: 31
国立国会図書館統計内規の一部を改正する内規（平成17内規1）	529 ④	: 22- 23
国立国会図書館に事務主任を置くの件を廃止する件（平成17館長決定1）	529 ④	: 22
国立国会図書館の英訳組織名に関する件の一部を改正する件（平成17館長決定3）	529 ④	: 29- 30
国立国会図書館文書取扱内規等の一部を改正する内規（平成17内規3）	529 ④	: 27- 28
国立国会図書館文書取扱内規の一部を改正する内規（平成16内規7）	526 ①	: 30- 31
国立国会図書館法の一部を改正する法律（平成17法律27）	530 ⑤	: 21
独立行政法人住宅金融支援機構法（抄）（平成17法律82）	533 ⑧	: 26
図書館協力用資料に関する件の一部を改正する件（平成16館長決定8）	526 ①	: 31
ホームページ編集協力員に関する件等の一部を改正する件（平成17館長決定4）	529 ④	: 30- 32
郵政民営化法等の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律（抄）（平成17法律102）	536 ⑩	: 18

おもな人事

おもな人事	526 ①	: 32-33/528 ③	: 19/529 ④	: 32-36/531 ⑥	: 33	
	/532 ⑦	: 28/533 ⑧	: 26/534 ⑨	: 14/535 ⑩	: 18/536 ⑪	: 18
功労記章の贈呈	526 ①	: 33				
職員の採用	530 ⑤	: 21-22/532 ⑦	: 28			
職員の死亡通知	526 ①	: 33				
職員の出向	529 ④	: 36/532 ⑦	: 28			
職員の退職	529 ④	: 36-37/532 ⑦	: 28/535 ⑩	: 18/536 ⑪	: 18	
職員の転任	529 ④	: 36/532 ⑦	: 28			
職員の表彰	531 ⑥	: 34				
専門調査員の退職	526 ①	: 33/528 ③	: 19/529 ④	: 36/532 ⑦	: 28	
平成17年秋の叙勲	536 ⑩	: 18				
平成17年春の叙勲	530 ⑤	: 21				
元職員に対する叙位	526 ①	: 33/534 ⑨	: 14			

遠客近客

527 ②	: 27-29/530 ⑤	: 24-25/533 ⑧	: 26- 27
	/536 ⑪	: 26/537 ⑫	: 28- 29

館内スコープ

総務部総務課	526 ①	: 13
主題情報部科学技術・経済課	527 ②	: 17
調査及び立法考査局議会官庁資料課	528 ③	: 17
書誌部逐次刊行物課	529 ④	: 21
関西館総務課総務係	530 ⑤	: 7
電子資料室	531 ⑥	: 11
総務部企画課	532 ⑦	: 18
資料提供部雑誌課	533 ⑧	: 9
資料提供部複写課館内複写係	534 ⑨	: 9
文化庁長官官房著作権課（人事交流編）	535 ⑩	: 7
関西館資料部文献提供課	536 ⑪	: 10
収集部国内資料課	537 ⑫	: 31

常設展示のお知らせ

第136回 豆本ーちひさきもの世界ー	527 ②	: 17
第137回 「竹取」物語	529 ④	: 21
第138回 明治の越境者たちー近代デジタルライブラリー収録資料に見る日本人の海外体験ー	531 ⑥	: 11
第139回 万国博覧会ーいってらっしゃい、はじめてのぼんぱく。ー	533 ⑧	: 9
第140回 明治の息吹～漫画・風刺画から	535 ⑩	: 7
第141回 なるふるー地震を科学するー	537 ⑫	: 31

法規等の制定・改正

国際子ども図書館の図書館奉仕の拡充に関する調査会規則を廃止する規則 （平成17規則2）	534 ⑨	: 14
国立国会図書館事務分掌内規の一部を改正する内規（平成17内規2）	529 ④	: 25- 27
国立国会図書館職員定員規程の一部を改正する規程（平成17規程1）	530 ⑤	: 21
国立国会図書館職員の勤務時間、休暇等に関する件の一部を改正する件 （平成17館長決定2）	529 ④	: 23- 24
国立国会図書館職員の倫理の保持に関する内規の一部を改正する内規（平成16内規6）	526 ①	: 29- 30
国立国会図書館職員の倫理の保持に関する内規の一部を改正する内規（平成17内規4）	529 ④	: 28- 29
国立国会図書館資料利用制限措置等に関する内規の一部を改正する内規（平成16内規5）	526 ①	: 29
国立国会図書館政府出版物国際交換業務要領の一部を改正する件（平成16館長決定7）	526 ①	: 31
国立国会図書館組織規則の一部を改正する規則（平成17規則1）	529 ④	: 24- 25
国立国会図書館展示会出品資料貸出規則の一部を改正する規則（平成16規則7）		

本屋にない本

- 『上野動物園のあゆみ 開園120周年記念 1882-2002』
上野動物園編・刊 (橋本美紀) 527 ②: 25- 26
- 『オロンスムーモンゴル帝国のキリスト教遺跡-』
横浜ユーラシア文化館編・刊 (白岩一彦) 532 ⑦: 26- 27
- 『柿の文化誌-柿物語-』
岡田勉著 南信州新聞社出版局刊 (村上かおり) 536 ⑪: 25- 26
- 『カステラ読本 復古創新 福砂屋』
カステラ本家福砂屋刊 (大森寿恵) 537 ⑫: 26- 27
- 『株式会社呉竹創業百周年史 家業から公器へ』
呉竹編・刊 (河合将彦) 533 ⑧: 24- 25
- 『京都消防55年の歩み 京の安全と安心を目指して 1948-2003』
京都市消防局編 京都市防災協会刊 (嶋田真智恵) 528 ③: 18- 19
- 『国際子ども図書館事業記録集 明治の煉瓦建築「旧帝国図書館」の保存と再生』
鴻池組編 国土交通省関東地方整備局宮繕部刊 (大塚晶乙) 529 ④: 14- 15
- 『象徴天皇家の宴』
官公庁資料編纂会編 政府官公資料頒布会刊 (内海和美) 530 ⑤: 14- 15
- 『新宿サブナード30年のあゆみ』
30周年記念誌編集委員会編 新宿地下駐車場刊 (石澤 文) 534 ⑨: 12- 13
- 『新世紀こども大博覧会-入江コレクションにみる児童文化史400年-』
兵庫県立歴史博物館編・刊 (大西啓子) 536 ⑪: 24
- 『製造元祖横浜風琴洋琴ものがたり』
横浜市歴史博物館、横浜開港資料館編 横浜市歴史博物館、横浜市ふるさと歴史財団刊 (中野路子) 535 ⑩: 12- 13
- 『大正の文庫王 立川熊次郎と「立川文庫」』
姫路文学館編・刊 (嶋本裕子) 535 ⑩: 14- 15
- 『多みんぞくニホン-在日外国人のくらし-』
国立民族学博物館編 千里文化財団刊 (酒井貴美子) 535 ⑩: 13- 14
- 『土と炎の世紀 ノリタケチャイナと製陶王国の100年史』
愛知県陶磁資料館学芸課編 愛知県陶磁資料館刊 (大久保百合子) 526 ①: 27- 28
- 『虎屋の五世紀 伝統と革新の経営』
虎屋刊 (片山信子) 527 ②: 26- 27
- 『日本の近代活字 本木昌造とその周辺』
『日本の近代活字 本木昌造とその周辺』編纂委員会編著
近代印刷活字文化保存会刊 (吉田多美子) 531 ⑥: 24- 25
- 『貼函の世界 Rigid paper box 2003』
篠崎貞雄責任編集 パックウェル刊 (齋藤憲司) 526 ①: 28- 29
- 『笑いの想像力 笑わせるヒトと笑うモノの博物誌 企画展』
福島県立博物館編・刊 (加藤真吾) 533 ⑧: 25

- 451- 『もしほ草』 (藤元直樹) 534 ⑨ : 口絵
 -452- 竹下勇日記 明治37年、38年 (竹林晶子) 535 ⑩ : 口絵
 -453- 『鞍木鐙類聚』 (大沼宜規) 536 ⑪ : 口絵
 -454- 野田笛浦著『海紅園文抄』(頼山陽・篠崎小竹等評)(宇津 純) 537 ⑫ : 口絵

本を魅せる 常設展示案内

- (11) 戦時下の出版 (石田暁子、松井美樹) 526 ① : 42
 (12) 豆本ーちひさきものの世界ー (中村淳一、鈴木雅美) 528 ③ : 36
 (13) 「竹取」物語 (佐藤菜緒恵、田中亮之介) 530 ⑤ : 34
 (14) 明治の越境者たちー近代デジタルライブラリー収録資料に見る日本人の海外体験 (奥田倫子、福林靖博) 532 ⑦ : 34
 (15) 万国博覧会ー初めて尽くしの万博物語ー(青山真紀、加藤眞吾) 534 ⑨ : 26
 (16) 明治の息吹ー漫画・諷刺画からー (久古聡美、鈴木雅美、松井美樹) 536 ⑪ : 40

What's 書誌調整?

- 第12回(最終回) さらに問いに向かって (鈴木智之) 527 ② : 34

電子図書館サービスのページ

- 第4回 電子展示会 (中井恵久) 526 ① : 39- 38
 第5回 国際子ども図書館の電子図書館サービス (櫻井武雄) 527 ② : 31- 30
 第6回 インターネット資源選択的蓄積実験事業 (WARP) (五十嵐麻理世) 528 ③ : 33- 32
 第7回 NDL-OPAC (国立国会図書館蔵書検索・申込システム) (原田圭子) 529 ④ : 41- 40
 第8回 総合目録 (梶田英知、南 有紀) 530 ⑤ : 33- 32
 第9回 データベース・ナビゲーション・サービス (Dnavi) (篠田麻美) 531 ⑥ : 37- 36
 第10回 ホームページ (滑川憲一) 532 ⑦ : 33- 32
 第11回 レファレンス協同データベース事業 (依田紀久) 533 ⑧ : 33- 32
 第12回 電子情報の保存と利用保証 (澤田大祐) 534 ⑨ : 25- 24
 第13回 電子図書館サービスの目標と今後 (豊田裕昭) 535 ⑩ : 27- 26
 第14回 ウェブサイトの収集・保存 (柴田昌樹) 536 ⑪ : 39- 38
 第15回 デジタル資源を著作単位で収集・保存する (塩崎 亮) 537 ⑫ : 39- 38

ビジュアル国立国会図書館博物館

- No.1 国立国会図書館月報 (総務部総務課編集係) 529 ④ : 42
 No.2 来館利用者サービスシステム 利用カード (磁気カード) (齋藤ひさ子) 531 ⑥ : 38
 No.3 通称「仕分け器」 英語名 "Card Sorter" (竹内ひとみ) 533 ⑧ : 34
 No.4 算定棒 (さんていぼう) : 通称 (伊藤克尚) 535 ⑩ : 28

レファレンス協同データベース事業 参加館募集	532 ⑦： 19
「レファレンス協同データベース」を公開しました	537 ⑫： 34
NDL-OPAC に雑誌記事索引廻り及データ追加提供	537 ⑫： 42

国際子ども図書館のページ

「おたのしみ会」開催のお知らせ	527 ②： 32
国際子ども図書館からのお知らせ	528 ③： 34
国際子ども図書館資料紹介 第3回 コルデコット賞受賞作品 (江口磨希)	527 ②： 33- 32
国際子ども図書館展示会「ロシア児童文学の世界ー昔話から現代の作品までー」 の開催について	528 ③： 35- 34
"Quality of Life" (富田美樹子)	526 ①： 41- 40

国立国会図書館の編集・刊行物

描かれた動物・植物ー江戸時代の博物誌ー	535 ⑩： 19
外国の立法 立法情報・翻訳・解説 第222号～第225号 526 ①： 35/529 ④： 37/532 ⑦： 27/534 ⑨： 15	
カレントアウェアネス 282号～286号 526 ①： 35/529 ④： 37/531 ⑥： 34/534 ⑨： 15/537 ⑫： 28	
件名標目の現状と将来ーネットワーク環境における主題アクセス 第5回書誌調整 連絡会議記録集	533 ⑧： 28
参考書誌研究 第62号	530 ⑤： 23
全国書誌通信 第120号～第122号	528 ③： 19/532 ⑦： 27/537 ⑫： 27
デジタル環境下における ILL、ドキュメント・デリバリーとその運用基盤 (図書館研究シリーズ No.38)	537 ⑫： 27- 28
レファレンス 第647号～第658号	毎号
NDL CD-ROM Line 点字図書・録音図書全国総合目録 2005年1号～2号	531 ⑥： 35/537 ⑫： 28

国立国会図書館の編集・刊行物 入手案内	527 ②： 別刷12頁
---------------------	--------------

稀本あれこれ

-443- 『有用植物図説解説原稿』田中芳男・小野職愨自筆 (膝館寿巳恵)	526 ①：口絵
-444- シャルル・ブラン編『レンブラント作品集』 (藤元直樹)	527 ②：口絵
-445- 両国橋掛直御修復出来形絵図 (中澤彰人)	528 ③：口絵
-446- 『國字國語改良論說年表』亀田次郎旧蔵 (小坂 昌)	529 ④：口絵
-447- 平山成信『昨夢録』大正14年 (鈴木宏宗)	530 ⑤：口絵
-448- 『繪比良圖考』清水晴風自筆 (川本 勉)	531 ⑥：口絵
-449- ヘンドリック・ヤンセン『木版画・銅版画の起源ならびに15・6世紀の 版画についての知識に関する試論』(1808) (折田洋晴)	532 ⑦：口絵
-450- ヨーアヒム・クレウス『シュレーゲン年代記』(白岩一彦)	533 ⑧：口絵

開催のお知らせ	536 ⑪	: 17
国際子ども図書館展示会「もじゃもじゃペーターとドイツの子どもの本」		
関連講演会	537 ⑫	: 40
国際子ども図書館展示会「ゆめいろのパレットⅡ－野間国際絵本原画コンクール		
入賞作品 アジア・アフリカ・ラテンアメリカから」開催中	535 ⑩	: 19
国際子ども図書館展示会「ゆめいろのパレットⅡ－野間国際絵本原画コンクール		
入賞作品 アジア・アフリカ・ラテンアメリカから」開催のお知らせ	534 ⑨	: 13
国際子ども図書館展示会「ゆめいろのパレットⅡ－野間国際絵本原画コンクール		
入賞作品 アジア・アフリカ・ラテンアメリカから」関連催物	536 ⑪	: 17
国際子ども図書館 夏休み催物「科学あそび」見えないものを見てみよう		
～ゴム風船を使った空気の実験	532 ⑦	: 29
国際子ども図書館ホームページが新しくなりました	531 ⑥	: 35
国立国会図書館件名標目表2004年度版を公開しました	531 ⑥	: 25
「国立国会図書館資料デジタル化の手引き」を公開	537 ⑫	: 37
国立国会図書館総合目録ネットワークシステムを公開	526 ①	: 37- 36
国立国会図書館における省エネルギー対策について	532 ⑦	: 27
児童書デジタルライブラリーの公開資料の拡大について	533 ⑧	: 28
社史・団体史等ご刊行に際してのお願い	536 ⑪	: 36
新シリーズが始まります－テーマは国立国会図書館を支えたモノ	528 ③	: 27
新連載が始まります－テーマは関西館の資料－	537 ⑫	: 42
スマトラ沖地震・インド洋津波災害について	528 ③	: 27
全国新聞総合目録データベースでプランゲ文庫新聞の書誌情報の提供を開始	536 ⑪	: 37
第7回図書館総合展に出展します	535 ⑩	: 18
第9回資料保存研修	530 ⑤	: 19
「帝国議会会議録」を当館ホームページで公開	532 ⑦	: 31- 30
電子展示会「描かれた動物・植物－江戸時代の博物誌－」を完全公開します。	537 ⑫	: 37
東京本館および関西館の資料整理休館日の臨時変更について	537 ⑫	: 41
東京本館・関西館 特別展示のお知らせ 描かれた動物・植物		
－江戸時代の博物誌－	534 ⑨	: 19- 18
年末年始のサービス休止について	536⑩	: 11/537 ⑫
平成17年度アジア情報研修	534 ⑨	: 17
平成17年度科学技術資料研修－国立国会図書館の所蔵資料を中心に－	533 ⑧	: 30
平成17年度国立国会図書館職員採用試験の実施について	528 ③	: 28- 29
平成17年度国立国会図書館職員採用試験要領（概略）	528 ③	: 29- 31
平成17年度児童文学連続講座－国際子ども図書館所蔵資料を使って	532 ⑦	: 19
平成17年度日本古典籍講習会の案内	533 ⑧	: 31
明治時代の本の著作権者を探しています	530 ⑤	: 15
「琉球列島米国民政府（USCAR）資料」の一部（広報局分）公開について	529 ④	: 15

子ども霞が関見学デー	534 ⑨	: 16
世界図書館情報会議／第71回国際図書館連盟 (IFLA) 大会および 第32回国立図書館長会議 (CDNL)	534 ⑨	: 16
第5回納本制度審議会代償金部会の開催	534 ⑨	: 15- 16
第6回灰色文献国際会議	526 ①	: 33- 34
第7回図書館総合展	537 ⑫	: 30
第9回資料保存研修「あなたにもできる図書館資料の保護と補修」の開催	533 ⑧	: 23
第13回アジア・オセアニア地域国立図書館長会議 (CDNLAO)	531 ⑥	: 34
第30回 ISSN センター長会議	536 ⑪	: 19
第45回科学技術関係資料整備審議会の開催	526 ①	: 34
「デジタル文化遺産の保存－原則と方策」国際会議	537 ⑫	: 30
ドマイヤー・北米日本研究資料調整協議会東アジア研究レファレンス・ サービス諮問委員会議長を招へい	526 ①	: 34
日本資料専門家欧州協会 (EAJRS) 第16回年次大会	536 ⑪	: 19
納本制度に関する懇談会 (インターネット情報の収集・利用に関する 制度化基本方針説明会) の開催	530 ⑤	: 22
フォーラム『『国立国会図書館関西館』完成までの軌跡』の開催	526 ①	: 33
プランゲ文庫図書マイクロ化共同事業に係る覚書の調印	530 ⑤	: 23
平成16年度アジア情報研修の開催	529 ④	: 20
平成16年度科学技術資料研修を開催	529 ④	: 20
平成16年度レファレンス研修を開催	529 ④	: 20
平成17年度国際子ども図書館連絡会議の開催	533 ⑧	: 23
平成17年度児童文学連続講座－国際子ども図書館所蔵資料を使って－ の終了について	536 ⑪	: 19
平成17年度第1回中央館・支部図書館協議会の終了について	532 ⑦	: 28- 29
平成17年度図書館員のための利用ガイダンスの開催	534 ⑨	: 16
ラマチャンドラン・IFLA 事務局長の来館	526 ①	: 33

〈お知らせ〉・各種案内記事

「アジア情報機関ダイレクター」当館ホームページで公開	529 ④	: 39- 38
描かれた動物・植物－江戸時代の博物誌－	535 ⑩	: 15
貴重書画像データベースをリニューアルしました	531 ⑥	: 23
近代デジタルライブラリー追加提供	533 ⑧	: 29
公開シンポジウム デジタル時代における図書館の変革－課題と展望－	537 ⑫	: 36
公開セミナー スマトラ沖地震・津波による文書遺産の被災と復興支援	535 ⑩	: 20
国際子ども図書館 学校図書館セット貸出し アジアセット (中国・東南アジア諸国) の貸し出し開始について	537 ⑫	: 40
国際子ども図書館展示会「もじゃもじゃペーターとドイツの子どもの本」		

バーチャル国際典拠ファイルと国際目録原則－米国議会図書館目録政策・ 支援室長バーバラ・B・ティレット博士講演会報告－（鈴木智之）	532	⑦	20- 25
米国議会図書館の電子情報保存事業（総務部企画課電子情報企画室）	530	⑤	31- 26
平成16年度国立国会図書館長と行政・司法各部門支部図書館長との懇談会 （総務部支部図書館課）	526	①	26
平成16年度視覚障害者サービス実施機関との懇談会 （関西館事業部図書館協力課）	529	④	16
平成16年度日本研究情報専門家研修（関西館事業部図書館協力課）	527	②	24
平成17年度国立国会図書館長と大学図書館長との懇談会について （総務部支部図書館・協力課）	537	⑫	25
平成17年度国立国会図書館長と都道府県立及び政令指定都市立図書館長との 懇談会について（総務部支部図書館・協力課）	533	⑧	6- 7
平成17年度重点目標・サービス基準と平成16年度評価について （総務部企画課）	532	⑦	1- 17
平成17年度サービス基準	532	⑦	13- 12
平成16年度サービス基準の評価	532	⑦	17- 14
平成17年度資料電子化研修（関西館事業部図書館協力課）	535	⑩	16- 17
平成17年度都道府県及び政令指定都市議会事務局図書室職員等との連絡会議について （総務部支部図書館・協力課）	537	⑫	24
平成17年度の図書館員を対象とする研修計画について （関西館事業部図書館協力課）	531	⑥	12- 13
目録情報と個人情報について（書誌部書誌調整課）	535	⑩	8- 10
レファレンス協同データベース事業 データ作成・公開に関する ガイドラインの策定について（関西館事業部電子図書館課）	537	⑫	32- 34
第1回レファレンス協同データベース・システム研修会開催	537	⑫	35
レファレンス協同データベース実験事業参加館フォーラム報告 （関西館事業部電子図書館課）	531	⑥	26- 32
APLAP（アジア太平洋議会図書館長協会）第8回ニューデリー大会報告 （土屋恵司、渡邊幸秀）	530	⑤	1- 6

NDL news 当館の最近の動き

アジア学会（AAS）・東亜図書館協会（CEAL）2005年年次総会および 北米日本研究資料調整協議会（NCC）会議	530	⑤	22
アジア太平洋議会図書館長協会（APLAP）第8回大会	527	②	29
安全運転に対する職員の表彰について	537	⑫	30
韓国国立中央図書館開館60周年記念シンポジウム	537	⑫	29- 30
韓国国立中央図書館との第9回業務交流の終了について	532	⑦	29
「関西館見学デー」の実施	537	⑫	30
国際子ども図書館の図書館奉仕の拡充に関する調査会（第2回）の開催	526	①	34- 35
国立国会図書館総合目録ネットワーク研修会の開催	533	⑧	23

洋書の部	531 ⑥	: 22- 18
新指定貴重書および準貴重書について－第37回貴重書等指定委員会－	(貴重書等指定委員会) 536 ⑪	: 27- 35
和書の部	536 ⑪	: 27- 30
新聞・雑誌の部	536 ⑪	: 30- 32
洋書の部	536 ⑪	: 35- 33
新年のごあいさつ	(黒澤隆雄) 526 ①	: 1- 3
第4回中国語文献資源共同構築・共同利用協力会議に出席して	(鴫田 潤) 528 ③	: 24- 26
「第12回総合目録ネットワーク参加館フォーラム」報告	(関西館事業部図書館協力課) 529 ④	: 17
第13回アジア・オセアニア地域国立図書館長会議 (CDNLAO) 報告	(和中幹雄) 533 ⑧	: 1- 5
第13回納本制度審議会の開催について	(納本制度審議会事務局) 530 ⑤	: 8- 9
インターネット情報の収集・利用に関する制度化基本方針 (概要)	530 ⑤	: 11- 10
第14回納本制度審議会の開催について	(納本制度審議会事務局) 534 ⑨	: 10- 11
第17回保存フォーラム報告「資料の災害対策－予防と緊急対応－『文化財防災ウィール』をどう受け止めるか」	(収集部資料保存課) 530 ⑤	: 16- 18
第24回日中業務交流報告－国立図書館におけるマネジメント－	(山口和人) 527 ②	: 1- 11
第34回日本法令沿革索引審議会の開催	(調査及び立法考査局) 533 ⑧	: 8
第45回科学技術関係資料整備審議会 電子情報環境下における当館の新たな指針 国立国会図書館の科学技術情報整備の在り方に関する『提言』を館長に提出	(主題情報部科学技術・経済課) 527 ②	: 12- 14
科学技術関係資料整備審議会 電子情報環境下における国立国会図書館の 科学技術情報整備の在り方に関する提言	527 ②	: 15- 16
大正期刊行図書のマイクロ化終了と図書・雑誌のマイクロ化に伴う利用停止について	(資料提供部) 535 ⑩	: 11
ドイツ図書館長エリーザベト・ニゲマン博士招へいの概要	(総務部支部図書館・協力課) 530 ⑤	: 12- 13
読書の楽しみをすべての子どもたちに 国際子ども図書館 バリアフリー絵本展と シンポジウム報告	(佐藤尚子) 536 ⑪	: 12- 16
日韓国立図書館の現況と児童図書館サービス 韓国国立中央図書館との第9回業務 交流報告	(ローラーミカ) 534 ⑨	: 1- 8
『日中韓資料保存会議』に参加して	(金箱秀俊) 528 ③	: 20- 23
納本制度審議会答申「ネットワーク系電子出版物の収集に関する制度の在り方 について」	(納本制度審議会事務局) 526 ①	: 4- 7
答申「ネットワーク系電子出版物の収集に関する制度の在り方について」の概要	526 ①	: 8
納本制度審議会答申－ネットワーク系電子出版物の収集に関する制度の 在り方について－ (要旨)	526 ①	: 9- 12

ネパール国立図書館職員のための研修事業 小さな仏像に寄せる願い	(那須雅熙) 528 ㉓ : 10- 12
日本での50日	(ブラディープ・バッタライ) 528 ㉓ : 13- 15
ネパールの資料保存研修実現に寄せて	(山田伸枝) 528 ㉓ : 15- 16

一般記事 (太字は巻頭記事)

新しい東京本館施設	(総務部管理課) 533 ㉔ : 10- 22
遠隔サービス利用者から見た国立国会図書館－平成16年度アンケート調査の結果から	(総務部企画・協力課) 527 ㉔ : 18- 23
オランダ王立図書館 (Koninklijke Bibliotheek) との協定の締結について	(総務部支部図書館・協力課) 537 ㉔ : 23
開館3周年を迎えた関西館	(関西館総務課、資料部、事業部) 536 ㉔ : 1- 9
韓国国立中央図書館との第8回業務交流について	(国立国会図書館業務交流代表団) 526 ㉔ : 14- 23
韓国国会図書館との業務交流 (第2回) - 課題の解決に向けて -	(岡村美保子、塚田 洋) 529 ㉔ : 1- 6
憲法室の5年間	(調査及び立法考査局) 535 ㉔ : 1- 6
国際子ども図書館の児童サービス-子どもたちに本の楽しさを伝える	(佐藤尚子) 528 ㉓ : 1- 9
国際子ども図書館の図書館奉仕の拡充に関する調査会 (第3回) の開催と答申の手交について	(国際子ども図書館の図書館奉仕の拡充に関する調査会事務局) 529 ㉔ : 7
国際子ども図書館の図書館奉仕の拡充に関する調査会答申	
－審議経過と答申の概要について－ (国際子ども図書館企画協力課) 531 ㉔ : 1- 8	
『国際子ども図書館の図書館奉仕の拡充に関する調査会答申』－概要－	531 ㉔ : 9- 10
国際政策セミナー「EUの現状と今後の課題－経済問題を中心として」講演「EU経済の主要問題」(コラード・モルテーニ ミラノ大学教授)	(芦田 淳、鳳佳世子) 536 ㉔ : 20- 23
国際セミナー「デジタル時代のドキュメント・デリバリー・サービス ビジョンと戦略」	(関西館事業部図書館協力課) 529 ㉔ : 8- 13
国立国会図書館年報 (平成16年度) から－統計を中心に その1－	534 ㉔ : 23- 20
国立国会図書館年報 (平成16年度) から－統計を中心に その2－	535 ㉔ : 25- 21
国立国会図書館の平成17年度予算について	(総務部会計課) 529 ㉔ : 18- 19
国立国会図書館法の一部改正について (解説)	(総務部総務課) 530 ㉔ : 20
重要文化財指定資料紹介 『師守記』中原師守自筆本	(主題情報部古典籍課) 526 ㉔ : 24- 25
新指定貴重書および準貴重書について－第36回貴重書等指定委員会－	(貴重書等指定委員会) 531 ㉔ : 14- 22
和書の部	531 ㉔ : 14- 17
新聞・雑誌の部	531 ㉔ : 17

『国立国会図書館月報』年間索引

— 平成17年(2005)1月号～12月号 [No.526～No.537] —

凡 例

項目別に配列し、各項目の中は、論題・記事名の50音順、次いでアルファベット順である。ただし連載記事は原則として掲載順に配列した。

特集はあるテーマについてまとめて掲載している形式を含み、特集名をゴシックで表した。

(記載例)

第34回日本法令沿革索引審議会の開催	(調査及び立法考査局)	533	⑧	8
↓	↓	↓	↓	↓
記事名	執筆者名	掲載号	掲載月	頁

項目一覧

特集記事	53	電子図書館サービスのページ	46
一般記事	52	ビジュアル国立国会図書館博物館	46
NDL news 当館の最近の動き	50	本屋にない本	45
<お知らせ>・各種案内記事	49	館内スコープ	44
国際子ども図書館のページ	47	常設展示のお知らせ	44
国立国会図書館の編集・刊行物	47	法規等の制定・改正	44
稀本あれこれ	47	おもな人事	43
本を魅せる 常設展示案内	46	遠客近客	43
What's 書誌調整?	46		

特集記事

図書館—未知の世界へのいざない 世界図書館情報会議

—第71回国際図書館連盟(IFLA)大会に参加して

(国立国会図書館 IFLA オスロ大会派遣団)	537	⑫	1- 19
国立図書館長会議、「世界図書館」会合、国立図書館分科会			
デジタル環境への国立図書館の挑戦	(安江明夫) 537	⑫	4- 7
議会図書館分科会 議員ニーズの正確な把握の重要性を再確認	(鎌田文彦) 537	⑫	7- 9
資料保存分科会関係会議、IFLA/PAC センター長会議			
「治す」より「防ぐ」— 予防的保存対策の実践をみる(小林直子)	537	⑫	10- 12
目録・書誌情報関係会議 さらなる国際化と標準化をめざして	(稲濱みのる) 537	⑫	13- 15
子ども・ヤングアダルト図書館分科会 発足50周年を迎えて			
— 歴史に学び、未来を拓く	(村山隆雄) 537	⑫	16- 18
オスロ点描	537	⑫	20- 22

ビジュアル国立国会図書館博物館

No.5

新聞挟み（新聞綴り棒）

新聞を展示するための道具。棒状のもので新聞をはさみ込み、留め具で固定する。新聞の厚さにもよるが、一週間分程はさむことが可能。専用の棚に掛けて提供する。

国会分館では、新聞を提供するのに「新聞挟み」を使っており、現在123組使用しています。新聞挟みというと、公共図書館やホテルのロビーにある、アルミ製でネジ留めのものをイメージするかと思いますが、国会分館のそれは木製です。2本の棒で新聞をはさみ、ダルマ型の穴のあいた小判型の留め具で両端を留め（写真1）、新聞棚に展示します（写真3）。現在、国会分館と同型のは、既製品ではもう生産していないそうです。



(写真1)



(写真2)



(写真3)

40年前に国会分館に配属されていた方にお話をうかがうと、当時も今と同様のものを使っていたとのこと。キャビネに古いものが残っていたので、よく見ると、何と「貴族院用」の刻印が！（写真4）このことから、貴族院図書館時代から改良を重ねて、数十年も使われ続けていることが分かります。



(写真4)

古いものは、棒が丸みを帯びているので転がりやすく、新聞をはさみづらいのですが、新型？は角ばっているので、転がらずはさみやすい。左手の掌底で新聞の折り目を抑えつつ指で棒を抑え、右手で両脇に留め具をはめます（写真2）。最初は少々やりにくいのですが、何度かやれば、ネジ留めのものより短時間で出来るようになります。

木製なので、手や紙になじみ、国会分館の雰囲気にもマッチします。これからもずっと使い続けて欲しい一品です。

あきもと しんすけ
(秋元 慎介)

国際子ども図書館

〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49

電話 03 (3827) 2053

利用案内 電話 03 (3827) 2069 (音声・FAX サービス)

ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>

国際子ども図書館は、国立国会図書館の支部図書館として内外の児童書とその関連資料に関する図書館サービスを国際的な連携のもとに行います。

利用できる人 どなたでも利用できます（ただし資料室は満18歳以上の方）。

資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。

開館時間 9:30～17:00

休館日 月曜日、国民の祝日・休日（5月5日こどもの日は除く）、
年末年始（41頁参照）、資料整理休館日（第3水曜日）

休室日 休館日以外に次の日が休室となります。

2階第一、第二資料室：日曜日

3階本のミュージアム：展示会準備期間

支部東洋文庫

〒113-0021 東京都文京区本駒込2-28-21

電話 03 (3942) 0122 (代表)

東洋学の発展を目的とする専門図書館。

アジア全般にわたる資料・研究書を所蔵しています。

国立国会図書館月報

平成17年12月号 (No.537)

発行所	国立国会図書館	平成17年12月20日発行	定価231円 (税込、送料別)
編集 責任者	矢部明宏	印刷所 発売元	有隣堂印刷株式会社
〒100-8924	東京都千代田区永田町1-10-1	〒140-0004	東京都品川区南品川6-2-10
	電話 03 (3581) 2331 (代表)		電話 03 (5479) 8721 (代表)
	FAX 03 (3597) 5617		FAX 03 (5479) 8720
	E-mail geppo@ndl.go.jp		E-mail cap15650@pop01.odn.ne.jp

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課に連絡してください。本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp> - 「刊行物」 - 「国立国会図書館月報」) でご覧いただけます。

表紙 中性紙使用

本文 中性再生紙使用

NATIONAL DIET LIBRARY MONTHLY BULLETIN

No. 537 December 2005

CONTENTS

Kaihoen bunsho by Noda Tekiho, with reviews by Rai Sanyo, Shinozaki Shochiku and others (Random notes on rare books, 454)

Libraries - A Voyage of Discovery: World Library and Information Congress - Participating in the 71st IFLA General Conference 1

Meeting of CDNL, Bibliotheca Universalis meeting and National Libraries Section: Challenges of national libraries in the digital environmentAkio Yasue 4

Library and Research Services for Parliaments Section: Reaffirmed importance of exact awareness of Diet Members' needsFumihiko Kamata 7

Meeting of PAC Directors and meetings related to the Preservation and Conservation Section: "Prevention" rather than "Repair" - preventive conservation in practiceNaoko Kobayashi10

Meetings related to the Bibliography and Cataloging Sections: Toward further internationalization and standardizationMinoru Inahama13

Libraries for Children and Young Adults Section: 50th anniversary - learning from history and opening the way to the futureTakao Murayama16

Sketch of Oslo20

Agreement signed between the Koninklijke Bibliotheek and the NDL23

Liaison meeting with staff of prefectural assembly libraries in FY 200524

FY2005 meeting between NDL Librarian and directors of university libraries25

The Collaborative Reference Database Project:
Guidelines on data producing and publishing32
1st workshop on the Collaborative Reference Database System35

Books not commercially available26

Publications from NDL27

Visitors to NDL28

NDL news29

Tidbits of information on NDL31

Digital library services page39

Annual index to National Diet Library Monthly Bulletin, nos.526-53753

Visual NDL Museum (5)54

<Invitation>
Symposium open to the public: Library reformation in digital era - challenges and prospects36

<Announcement>
Announcement of regular exhibition31
Collaborative Reference Database open to the public34
Full version of the Electronic Exhibition "Fauna and Flora in Illustrations - Natural History of the Edo era" available37
"National Diet Library Digitization Handbook" available37
Book Sets Lending Service to School Libraries of the International Library of Children's Literature: lending out of Asia set (China, Southeast Asia) starts40
Lectures related to the exhibition at the International Library of Children's Literature: Struwwelpeter and other German children's books40
Library closure at the year-end and New Year41
Temporary change of the monthly closing day for refilling at the Tokyo Main Library and Kansai-kan41
Retrospective data of the Japanese Periodicals Index added to the NDL-OPAC42
A new series "Collections of the Kansai-kan" will start soon!42

NATIONAL DIET LIBRARY
Tokyo